

---

# 汝、魔を討つ刃となれ。

タナボルタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

汝、魔を討つ刃となれ。

### 【Nコード】

N9230X

### 【作者名】

タナボルト

### 【あらすじ】

少年は夢を見る。誰かの夢の記憶を。

少年は夢を見る。別の世界の誰かの記憶を。

少年は出逢う。魔導書の精霊と。

少年は出逢う。  
『魔を討つ刃』と  
。

## プロローグ（前書き）

初投稿です。

いやあ、怖い。

これが連載といつやつか……！！

完結目指して頑張っていきましたよー！！

## プロローグ

様々な景色。様々な人物。  
入れ替わり、立ち替わり、現れては消えていく。

人で溢れかえり賑やかな街。厳粛な教会。見かけとは裏腹に騒々しいその内側。巨大な屋敷。その地下に広がる、更に広大な施設。

浮かんでは消えていく。

慌ただしく歩き周り、だが明日への活力で満ちた街を行く人々。清楚なシスター。しかし意外とアグレッシブなその性格。麗しいお嬢様。美しさに潜む、その思いの強さ。凛々しい執事。鍛え抜かれた鋼の肉体、完璧なる仕事を行うその姿。

ただ浮かんでは、消えていく。

これは夢。

人が寝ている時に見る夢。

何の整合性も無い、ただただ唐突に始まり終わる、ただの夢。

だが、そうではないとしたら？

これが只の夢ではなく、例えば、自分ではない、他の誰かの『記憶』ならば？

何の関わりも無いはずの、お互いが知らないはずの、『別の世界の誰か』の記憶だとしたら？

それは、只の夢と言えるのだろうか？

この『夢／記憶』を見ているのは少年だ。

普通の人より助平で、普通の人より力を持ち、普通の人より破天荒な人生を『繰り返してきた』、ちっぽけな少年だ。

普通の人より両親が偉大だった。

普通の人より『力』があった。

普通の人よりコンプレックスが強かった。

普通の人より自分に素直だった。

そして、普通の人より危険な恋をして、結果、その恋を失った。

魔神アシタロス。

『少年』の敵。

『少年』の倒すべき敵。

『少年』の憎むべき敵。

『少年』の恋人の父。

『少年』に対する『黒の王』

かつては彼まで辿り着けなかった。

かつては彼に殺された。

かつては彼と共に戦い、死んだ。

そして今度は、彼を打ち倒した。

様々な犠牲があつた。

世界と恋人を天秤に掛けられた。

彼を倒すには、恋人に自分から止めを刺さなければならなかった。  
選択出来ない。

出来るはずがない。

しかし、少年は選択した。

彼を倒し、自らが正しいと思う、自らが愛する世界を、選んだ。

例えようもない絶望が襲つた。

何度狂えればいいのか、何度正気を失ってしまえばいいのか、何度死ぬ  
ことが出来ればいいのかと考えた。

考えた。考えた。考えた。考えた。考えた。

考えて、考えて、考えて、考えて、考えて。

考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考え抜

いて、答えを出した。

彼女は居ない。

だが、自分の中で生きている。

自分の娘として生まれ変われる可能性もある。

悲しむのは止める。

後ろを見ない。

自分と彼女は『終わってしまった』のだ。

またかつての様な関係には戻れない。

少年は思った。

こんなのは自分らしくない。

こんなのは自分のキャラじゃない。

ウジウジ考えて、悲嘆に暮れるのはもう終わり。

前を向いて、いつもの自分を。

でも、いつもとは少し違う、ちょっとだけ成長した自分を。

新しい自分を始めよう。

スケベでバカで情けなくて誘惑に弱くて泣いて喚いてバカやって、  
でも強く正しくかつこよく。

弱きを助け、強きを挫く。

更には女の子にモテてお金持ちになって武道館でジヨニー・B・グ  
ッドを歌う。

少し、いやかなり高望みだが、これくらいの男にはなってやるう。

そう、思った。

今見てる『夢ノ記憶』の男を見てみると、もっとその思いが強くなる。

自分と同じく助平で。

自分と同じく貧乏で。

自分と同じく美人に弱く。

自分と同じく情けなく。

自分と同じく恋人を失って。

でも、自分と違ってかっこよく。

自分と違って雄々しくて。

自分と違ってトラウマがあっても前向きで。

乗り越えて。

力も失い、ボロボロで、それでも戦って足掻いて立ち上がって。  
巨大な敵も打ち倒して。

自分と違って恋人も蘇って。

何ていう男だろう。

『後味悪い』なんて理由で巨悪と戦い、打ち倒すなんて。

なんてやつだ。なんて『でたらめなやつ』(デウス・エクス・マキナ)だ。

会ってみたいと思った。

話してみたいと思った。

意外にも話は合いそうだし、お互いに貧乏脱出計画でも立てようか。

(女性の趣味には同意出来ないが……)

会ってみたい。話してみたい。

自分と共通点の多いこの男……

『魔術師』 大十字九郎に

そう、『GS』横島忠夫は『夢ノ記憶』の中で思った。

だが、横島忠夫は知らない。

彼と自分の更なる『共通点』

そう、倒すべき『本当の敵』のことを。

プロローグ

『The Dream/Memory』

四畳半のとあるアパートの一室。

着替えや雑誌、ゴミなどで少々散らかったその室内に、煎餅布団で眠る一人の少年が居た。

真面目にしていれば、その容姿は中々に良いのだが、いつもふざけたりおちゃらけたり泣いたり喚いたりしているの、それに気付いている者はかなり少ない。

そんな、少し損をしている少年。

少し前までは貧弱なボーヤと言われていたが、今は食生活が改善され、職場での激しい労働により筋肉もちゃんと付き、体脂肪率一桁という引き締まった見事な肉体を手に入れていた。

体格からか筋肉が目立つことはあまり無いが、見かけとは裏腹の力強さに惹かれる者も、ここ最近は多くなってきている。

まあ、元来の女好き過ぎる性格が災いしてモテる……という領域まで達していないのはかわいそうであるが……。

そんな少年だが、今は夢を見ているのか、少々魔うなされている。かなり長い時間魔うなされていたのか、彼が寝間着として使用しているタンクトップのシャツは、寝汗でしっとりと濡れていた。

しかし、その時間もようやく終わりを迎えることになる。

窓の外が俄かに明るくなってきた。

光。

地平線から昇り来る、巨大な一日の始まりの象徴。陽が昇る。

瞼を灼く、強い光。

朝陽。

朝が来たのだ。

セットされていない目覚まし時計は、午前五時半を指していた。

「……………ん、んう……………」

暖かい光に照らされ、少年は徐々にだが覚醒する。

「……………朝、か……………」

むくりと半身を起こす少年。

寝ぼけ眼をゴシゴシとこすり、背筋を伸ばし伸びをする。

「ふぁ……………もうそろそろシロの奴が来るな……………」

顔洗って朝飯の用意するか……………」

少年は欠伸をしながら布団から抜け出し、独り言を呟く。

シロとは少年の弟子である人狼という種族の妖怪で、ござる口調と白銀の長髪が特徴の可愛らしい少女のことだ。何故か頭髪の一部が赤く染まっているのも特徴といえば特徴か。

とある事件をきっかけに少年と出会い、少年の特殊技能の一つ、『  
霊波刀』に感服し、弟子入りをした。

その懐きぶりは凄まじく、端から見れば完全に少年に恋する乙女である。

一人暮らしをしているとついつい独り言を呟いてしまうのは仕方のないことだ。

少年は独り言の通りに顔を洗い、ついでとばかりにシャツを替え、ワイシャツを着てジーンズを履く。

その後冷蔵庫から卵とベーコンを二人分取り出した。

台所に行き、フライパンに油を引いてまずベーコンを焼く。

両面をカリカリに焼いたところで卵を投入。

面倒なのか、二人分一気にだ。

水を少し入れ、フライパンに蓋をする。

どうやらベーコンエッグを作るようだ。

少年は完成を待つ間に昨夜見た夢の内容を反芻した。

(あの夢……なんか所々曖昧だったけど、妙に気になるんだよな

「……………」

夢。

人が寝ている時に見る夢。

何の整合性も無い、ただただ唐突に始まり終わる、ただの夢。

「いや……………そんな感じじゃなかったな……………。あれじゃまるで……………」

まるで。

まるで、何なのだろうか？

その夢には主人公が居た。

もう名前も思い出せないが、恐らく自分より二、三歳ほど年上の男だった。

しかも忌々しいことかなりの美形だ

ヒロインもいた。

夢の主人公よりも、今の自分よりもさらに年下に見える、ヒラヒラしたフリルが特徴の服を来た少女。

「あの子が出て来る度に……………何というか、キュンときたというか……………」

これは、夢の主人公の感情なのだろうか？

他にも何かと戦っている時には闘志やら焦りやらの感情があったように思う。

その時その時の感情が明確で、なにより実感が生半可じゃないレベルだ。

これではまるで……

（ 誰かの、記憶みたいだな……。 ）

記憶。

誰かの記憶。

夢の主人公の記憶……？

（ ……んなアホな。 ）

少年は頭を振り、考えるのを止めた。

丁度良い感じに卵も半熟になっている。

いや、火が通っているから、もう玉子が……？

少年は益体もないことを考えながら、料理を皿に移した。

卓袱台にベーコンエッグの乗った大皿と、二人分のお茶碗を置き、

昨日の晩にセットしておいた炊飯器の蓋を開ける。

ホカホカと湯気を上げ、銀色に光る綺麗なご飯が見える。

よし、とお茶碗にご飯をよそおうとしたその瞬間、外の方から地響きが聞こえてきた。

しかも段々と近付いてきている。

「来たか。しかしもうちょっとおしとやかに来れんもんかね、シロの奴……。」

少年は溜め息混じりに呟く。

次の瞬間には扉は思い切り開け放たれていた。

「先生—————!! オハヨーでござる—————!!」

今の時間帯には到底似つかわしくない程の元気過ぎる人狼少女、犬塚シロの来訪であった。

「はいはい、おはよーさん。それはいいが、近所迷惑だつて何回言ったら分かるんだお前は。」

少年は挨拶を返しつつ、シロの頭を小突く。

当のシロといえば、「ごめんでござると言いながら舌を出している。

と、急にシロが鼻をヒクヒクさせた。

「くんくん……。この臭いは……。ベーこんえつぐでござるか!？」

目敏く、卓袱台の上の料理を見つけるシロ。

もはやその目は料理に釘付けで、涎を垂らしている。

「おう。お前が来ると思ってたちゃんと二人分用意した。さつさと食おうぜ。」

「はい! いただきますでござる!」

二人は卓袱台を囲み、お茶碗にご飯をよそい、手を合わせて『いただきます』をしてから食事を開始した。

その間シロはずっと尻尾をブンブンと振っている。

その様は狼と言うよりは、どこか犬っぽい。  
可愛らしくはあるのだが……やはりまだまだ子供のようだ。

シロは美味しーでござるーとか、先生も料理の腕を上げたでござる  
などか、偶にはもっと肉が食べたいでござるとか言いながら、賑や  
かに食べている。

対する少年はというと、ありがとうとか、おキ又ちゃんにはかなわ  
んがなーとか、贅沢を言うとか返しながら、やはり賑やかに食べ  
る。

やがて同じタイミングで食べ終わり、ちゃんと手を合わせて『ごち  
そうさま』をする。

食器は流しに置き、少しばかりの食休み。

この後はシロとの散歩と言う名の長距離マラソンが待っている。  
ちゃんと時間を置かないとせつかく食べた物を吐き出しかねない。

とは言っても少年もシロもかなりの強度の胃袋を持っているので、  
ほんの五分程しか休まない。

本当に食休みの意味があるのか甚だ疑問である。

少年はワイシャツの上にGジャンを着て、額にバンダナを締める。  
靴を履き、シロと共に外に出て、ドアの鍵を掛ける。

アパートから少し離れた歩道の上で少年は準備体操をする。  
十分に体が温まったところで、シロが話しかけてきた。

「それじゃあ先生、今日もお散歩頑張るでござるよ。」

「本来散歩は頑張るもんじゃないと思うんだがな。」

少年は少し落ち込みつつ答える。

週に四、五回程度の早朝散歩。

その距離は長くて五十キロメートルにも達する、デス・ハイクだ。しかも全力疾走しなければならないという暗黙のルールがある。

少年はもう諦めていた。シロは断っても断っても頼んでくる。

ならば潔く走って散ろう。

そんなことを思っ走り続けて幾星霜。

なんとかかっついて行けるようになっていた自分を誉めてあげたい少年だった。

「それじゃあ行くでござるよ、横島先生！」

「うえ〜い、手加減しろよ。」

二人同時に走り出す。

これが、横島忠夫の一日の始まり。

シロとの散歩を終え、アパートに戻ってきた横島。シロとはアパートの前で別れ、現在は一人で部屋の中に居る。今回の走破距離は約

十五キロメートル。横島の言った通り、少し手加減をしてくれたらしい。

現在の時刻は午前七時五十分と少し。

まだ学校には十分間に合う時間だ。

散歩で汗をかいた横島は、その汗を拭うために水で濡らしたタオルを電子レンジで温めた。

十分に温まったタオルで体の汗を拭い、服を制服に替える。半袖だ。

季節は初夏。

まだセミが鳴く時期でもないが、それでもかなり気温が高くなってきた。

横島は学校指定の鞆を持ち、ズボンのポケットに財布とハンカチを入れて部屋を出た。

戸締まりを確認し、いざ学校へ。

時刻は午前八時と少し。

横島は太陽に焦らされ、熱を上げるアスファルトの上を歩き始めた。

学校。

横島の通う高校は、ある点を除いてごく普通の高校だ。

偏差値がそう高い訳でもなく、生徒の数が多すぎたり少なすぎたり

もしない。

敷地もごく一般的な程度で、どこぞの学園都市やらマンモス校みたいな広大な土地も無い。

ごくごく平凡な、普通の学校。

では、何が異常なのか？

それは、一部の生徒の存在である。

G S。

妖怪。

これらが生徒として学校に通っているのだ。

G Sは横島をはじめ、半吸血鬼であり、最強最悪の真祖の吸血鬼『ブラドール伯爵』の血を引く、見目麗しい金髪碧眼の少年『ピエトロ・ド・ブラドール』

愛称『ピート』

まあ、少年とは言っても実際は七百歳なのだが……。

次は驚異的な精神感応能力を誇る巨漢、『タイガー寅吉』  
自身の霊能である精神感応を使用すると、何故か体が虎になる。

その二メートルを越す長身と、重戦車のような体から繰り出す突進はかなりの威力を誇る。

何故か影が薄い。

ゴースト・スライパー  
GS。

現代の悪霊扱い。

恐らく、世界で最も金を稼ぐ事ができ、そして世界で最も金を失う職業である。

横島、タイガー、ピート。

この三人は、あと一人の少年を含め、GS界では若手最高峰と呼ばれている。

特に横島は、一般的にはまだまだ知名度は少ないが、全身の霊力を一点に集中し、鉄壁の強度を誇り、攻撃にも使える爆発小盾『サイキック・ソーサー』

伸縮自在の腕、霊を切り裂く霊力の刃『霊波刀』を展開出来る『栄光の手』（ハンズ・オブ・グローリー）

そして、神の如き力を持つ『切札』がある。

それを上手く操れば、あらゆる神魔をも討滅することが出来る、最強の『鬼札』

それらの存在が、横島を戦闘力だけならば世界でも三指に入る程の戦闘力を授けている。

加え、発射された弾丸を見切る動態視力、弾丸を避ける反射神経、相手のペースを乱す罫や話術。

横島が最強になる日が来るのもそう遠くないのかも知れない。

妖怪生徒。

学校机の九十九神である、『机妖怪の愛子』

見た目は黒い長髪の美しい少女だが、その本体は古ぼけた学校机であり、その体内には時間と空間の概念が通用しない『異界』が存在している。

かつてはあらゆる時代から生徒達を誘拐し、学校生活の青春を味わおうとしていたが、横島の上司である美神令子の説得や、誘拐されていた生徒達の言葉により改心し、現在では教師陣に最も信頼されている生徒として学校に存在している。

更には妖怪ではないのだが、花戸小鳩という女生徒に貧乏神から福の神となった『ビンちゃん』と呼ばれている神族がいるが、これとって説明することが無い。

せいぜい『チーズあんシメサババーガー』なる珍奇極まる物を売っていたぐらいだ。

(別名幽体離脱バーガー)

そんな最早どこが普通なんだよ、と言いたぐらいの学校だが、意外にも世間からの評判は悪くない。

逆に妖怪や霊達に対する偏見が無くなってきているのは、この学校と、学校に通うGS、妖怪のおかげだろう。

ワイワイガヤガヤ、と騒がしい朝の教室。

机に座り、話をする少年。

日直日誌を書いている少女。

教室の後ろの方でプロレスの技を掛け合う少年達。

ファッション誌を読み、現在の流行に意見を言い合う少女達。

嗚呼、素晴らしい。

少年達よ、輝きたまえ。

嗚呼、素晴らしい。

少女達よ、華を咲かせよ。

嗚呼、素晴らしきかな学校生活。

これぞ、これぞ正に

「青春だわ……。」

感涙に咽び、うっとりとした声を漏らす黒髪の妖怪少女、愛子。彼女の隣には金髪の少年ピートが佇んでおり、今の愛子の台詞に苦笑を漏らしている。

「確かにそうですね……。友達とお喋りをしながら先生を待つ。当たり前ですが、これは学生の時にしか出来ませんからね。」

ピートは窓の外に視線を向けながら呟く。

その声に若干の寂しさが混ざっていたのは、今までの七百年もの歳月を思い起こしたからだろうか？

家族と過ごした日々もあった。

家族から離れた日々もあった。

人と喜びを分かち合った日々もあった。

人に意味なく嫌われた日々もあった。

では、今は。

今は、どんな日々だろうか。

幸せな日々か。

不幸せな日々か。

騒がしい日々か。

穏やかな日々か。

優しい日々か。  
厳しい日々か。  
明るい日々か。  
暗い日々か。

今は、確実にそうだと言える。  
全てが混ざり合い、全てが輝いている。

幸せで不幸せで、騒がしくも穏やかで、優しくも厳しい、明るく暗い日々。

全てが極端に顔を出し、暴れ出し、混沌となった、辛くも楽しい毎日。

寧ろ嬉しい、楽しい事の方が多いのではないだろうか？

だとすれば、それはきっと彼のおかげだろう。

女好きで、お調子者で、優しくて、嫉妬深くて、泣いて喚いてバカやって……。

決める時は決める、残念な時は本当に残念な彼。

煩惱全開。  
欲望全開。

最近は何故かかなり収まっているが、いつ何時暴走するか分からない彼。

見ていて飽きない彼。

僕の親友

横島忠夫。

妖怪だろうが神族だろうが魔族だろうが、美人で可愛ければ関係のない彼。

女性男性だけでなく、種族や生まれも関係のない彼。

彼の存在に、自分がどれほど救われたか。

彼には感謝してもし切れない程の大恩がある。

彼からすれば当たり前なのだろうが、僕達からすれば、それがどれほどの救いか。

願わくば、世界中の人々が、彼のような在り方であることを。

………神よ、訂正します。  
どうか、彼の煩惱だけは人々に伝染うつらなきように。

「………ピート君の百面相なんて、珍しい物を見たわね………」

どこか寂しげな表情をしたかと思えば、優しげな表情になり、楽しそうな表情になり、何かを祈るような表情をし、最後には冷や汗を流しながら胸の前で十字を切る。

愛子の台詞を聞いたピートは、またもや苦笑を漏らした。

賑やかで騒がしい教室。

そこに、ついに横島忠夫が到着する。

「おーっす、おはようさん。………ふぁ。」

教室の扉を開け、挨拶をしながら欠伸をする。

朝の散歩が良い運動となったのを加え、夢を見た分眠りが浅かったのが災いしたようだ。

アパートを出て途中までは良かったのだが、校門に着く頃には眠気が来た。

階段を上り、二階にある教室に着いた時点でもうかなり眠そうになっている。

横島の登校に気付いた生徒達は、皆挨拶を返す。

中には少し顔を赤らめた女生徒も居たようだが、それは誰にも気付かれずにいる。

横島はピートと愛子の近くの席に付き、二人に挨拶をする。

「ふあ……あ。おあよーっす、ピート……。愛子……。」

欠伸を繰り返し、目はショボショボして呂律は回っていない。大分おねむなようだ。

「おはようございます、横島さん。何か、とても眠そうですね。夜更かしですか?」

「おはよう、横島君。夜更かしも良いけど、偶にはちゃんとシャキーンとしなきゃダメよ?」

二人は横島に挨拶を返し、ピートは眠そうな理由を尋ね、愛子は横島を諫める。

それに対し横島は目をこすりながら答える。

「いや、夜更かしはしてねーんだけどさ……。朝のシロの散歩と、昨夜見た夢のせいだな……。」

シロの散歩。

それは良い。いつものことだ。

今までもシロの散歩が有った日は、横島は眠そうにしている。  
……土日以外は。

では、夢は？

横島が夢を見て眠そうにしている。  
一体どんな夢を見たのだろうか。

ピートと愛子は興味を引かれ、夢について尋ねる。

「いや、なんちゅーか……。夢の、主人公が色んな経験をしていく  
んだが……。その時その時の感情が凄くてな……。」

言葉にしづらいのか、曖昧な感じに答える横島。

「感情……ですか？ 例を挙げれば、どのような……？」

ピートの質問に、腕を組み目を瞑って上を向く。

欠伸が出る。

「んー……。例えば、夢のヒロインが登場したら胸がキュンと  
したり……。悪い敵が出てきたら怒りとか憎しみ？ とかが溢れそ  
うになったり……。」

最早茫洋としている夢を思い出していく横島。  
やはり、曖昧な部分しか覚えていない。

しかし、強烈に印象に残っているモノもある。

(あの女の子……。)

欠伸が出る。

白い、フリルが沢山ついた服を着ている少女。

紫がかつた銀の髪と、翡翠の瞳、透きとおるような白い肌。

彼女が現れる度に動悸がおかしくなる。

早鐘を打つ心臓。

高鳴り、色めき立つ心。

何時までも、何処までも側に在りたいと高ぶる感情。

総て、あの夢の主人公の心／感情／気持ちなのだろうか……。

(そして……。)

欠伸が出る。

あの、敵に対する感情　。  
怒りや憎しみ、焦燥や劣等感、恐怖、畏怖、狂怖……。

それらは全て悪しき感情だ。

自分を縛り付け、動きを、自分を変えてしまう。

だが、あの感情　　。

あれは、何か違った。

同じなのに。

同じ様なのに。

かつての自分と同じはずなのに。

(正しい　　感じがしたな……。)

欠伸が出る。

正しい、悪い感情。

(例えて言うなら『正しき怒り』……ってか？　何かかっこいいな。)

欠伸が、出る。

そして、最後。

主人公の中にある、最初から最後まで一貫した気持ち。

何があっても揺らぐことのない、確かな気持ち。

何のことはない、大したことのない、ただただ普通のありふれた気持ち。

『後味の悪い気持ちはしたくない』

そんな気持ち。

だが、横島はそれを気に入った。

何か、胸にストーンと落ち着いた気がしたのだ。

（後味悪い思いはしたくない……。うん、良いな、これ。座右の銘にしよう。）

欠伸が出る。

また、欠伸が出る。

『座右の銘』

美女、美少女の味方。

煩惱全開。

お前の彼女は俺のもの。俺の彼女も俺のもの。

後味の悪い思いはしたくない。

(完璧だな……。)

欠伸が出る。

目が霞む。

意識が遠ざかる。

横島の話聞いたピートと愛子は、その夢に対する自分の見解を語る。

「うーん……。よく分かんないけど、面白そうな夢ではあるわよね……。今度夢占いででもしてみたら？ 何か分かるかもしれないわよ。」

「夢の主人公の感情……。それはもしかしたら、誰かの記憶かもし

れませんよ?」

ピートの考えに思わず聞き返す愛子。  
愛子に自分なりの考えを語るピート。

それを見ながら横島は、いよいよ自分の意識が遠い眠りの彼方に飛んでいくことを悟った。

「あー……つと、悪い。考えてくれるとこ悪いけど、もう寝るわ。」

昼休みになったら起こしてくれ……。」

横島はそう言い、腕を枕にして机に突っ伏した。  
意識は今にも飛んでいきそうだ。

「あつ、ちょっとダメよ横島君!　せめて先生が来て授業を始めてから先生の目を盗んで、さも授業を聞いているかのような姿勢で寝なさい!」

「寝るのは止めないんですね……。」

愛子のどこか間違ったツツコミに呆れつつ、ピートは呟いた。

その後間もなく始業ベルが鳴り、先生が来た。

横島は何とか意識を保ち、礼を済ませ、授業が始まった瞬間に頬杖を付き、教科書とノートを開き、シャーペンと消しゴムを用意して目を閉じた。

愛子の言葉を忠実に守ったようだ。

睡魔が襲う。  
意識が薄れる。

ああ、そして  
。

横島は旅立つ。  
夢の世界へ。

そこで見る。  
彼の記憶を。  
彼の戦いを。

別の『世界』の、『誰か』の記憶。  
何の関わりもないはずの存在

『魔術師』 大十字九郎の夢／記憶を

プロローグ

『The Dream/Memory』

了。

タイガーは仕事で欠席だった。

## プロローグ（後書き）

文体が安定しません！！

この物語は主人公二人、ヒロイン二人でお送りします。

ピートはヒロインじゃありませんよ？  
本当だよ？

## 第一話（前書き）

お待たせ致しました。

第一話の投稿です。

今後ものぐらいの文章量になるかもしれませんが。

それではお楽しみ下さい。

## 第一話

少年は、夢を見ていた。

その夢で、少年は巨大なロボットに乗っていた。黒い鋼の肉体に、金色に輝く大きな角が映える、巨大な人型ロボット。

少年の操縦席の前部には、バイク型の操縦席に跨っている一人の少女がいた。

(……………あの女の子かな……………。)

。

(……………?)

何かが聞こえた。

声が、聞こえた気がした。違う、と言っていたような気がする。

。

、

。

(何だ……………? 何て言ってるんだ……………?)

相変わらず、何か聞こえる気がするが、ほとんど何も聞こえない。

一体誰が、一体何を話しているのかが分からない。



体の横を、何かが通り過ぎる。

それは後ろから伸びてきた、肉の触手だった。

てらてらと何かしらの粘液でぬめり、鼻が曲がりそうな程の悪臭を放っている。

「……………っ!？」

触手が足に絡みついてきた。足を取られ、前のめりに走った勢いのままに倒れる。

したたかに体を打ったが、気にしている余裕などない。

逃げなければ。

これは夢だ。それは分かる。分かっているのだ。

これは夢だ。人が寝ている時に見る夢だ。

分かっているのだ。分かっているのだが

（　　こわい。）

こわい。怖いのだ。恐怖で狂いそうなのだ。

背後より迫り来る兇悪で狂悪な何か、怖くて怖くて仕方がない。

もがきながらも前に進む。逃げるために。生き残るために。生きて、生きて、生き続けるために。自分の生を理不尽に終わらせな  
いために。

でも、ああ、駄目だ。逃げられない。  
何故ならば、もう、すぐそこに。

『いいくないい！ イグナいいいい！ よおおおぐそとおお  
おおおおおす！！』

俺の頭のすぐ後ろで、邪悪な雄叫びが木霊した。

『うわああああああああああああああああああああああああ  
ああああああ！！！！！！』

## 第一話

『制御出来ない感情』

都内某所。

ビルや住宅の中に、ひっそりと佇む、少し古ぼけた洋館。  
それは、横島の雇い主である美神令子の自宅兼除霊事務所だ。

現在そこに住んでいるのは、事務所所長である現役GSにして、  
世界最高のGS『美神令子』

三百年もの時を越え、現代に生き返ったネクロマンサーの少女『氷  
室キヌ』

金毛白面九尾の狐の生まれ変わりにして、シロのライバル？ 『タ  
マモ』

そして人狼ござる娘『犬塚シロ』の四人である。

現在午後四時五十分。あともう少しすれば横島が来る時間帯だ。四人は横島について話つつ、横島が来るのを待っていた。

「最近のヨコシマって、何か変よね。無駄におとなしいってというか……。」

「そうでござるか？ 先生は一緒に散歩して下さい、現場では獅子奮迅の活躍をなさるし、一緒に散歩して下さい、元気いっぱいになれるよ。」

「そうじゃなくてねえ……。」

タマモとシロは互いに横島についての意見を出しているのだが、やはりシロは微妙にズレた発言をしている。そしてそれに突っ込むタマモ。それに反発するシロ。そして段々と口喧嘩に発展していく。

これがいつもの二人の様子。

「まあまあ二人とも。タマモちゃんが言いたいのはそういうことじゃないと思うよ、シロちゃん。」

キヌは二人を宥めつつ、シロに自分なりの意見を出す。

「タマモちゃんが言いたいのは……。多分、覗き……とか、えっちなことをしないとか、そんなことじゃないかなあ……？」

少し顔を赤らめて答えるキヌ。横島がセクハラをしなくなったというのに、何となく残念そうな顔をしているのは何故だろうか。

「ああ、確かにねえ。まあ覗きをしなくなったのは良いんだけどね。仕事もキチンとこなすようになったし、客からの評判も良いし、儲かるし……。」

美神は所長席で札束を嬉しそうに数えながら話に加わる。

「一つ百万として、それが机に二十以上……。」

美神令子除霊事務所は相変わらずの好景気のようにだ。

「あ、なるほどござる。」

シロもようやく得心がいったのか、手をポンと打った。だが、すぐさま思案顔になって疑問点を呟く。

「……確かに先生は最近せくはらをしていないでござるな。えろ本とやらも先生の部屋には無かったでござるし……。」

その呟きにその場の空気は騒然となった。

「はあ！？ 横島君の部屋にエロ本が無かったア！！？ 隠してるとかじゃないの！？」

「そ、そんな！？ 見間違いじゃないの！？ 見間違いだと言ってよシロちゃああああん！！！」

「いやあああああ！！ これは天変地異の前触れ！？ 滅ぶの！？ 明日にでも世界は滅ぶと言うの！？ もっとお揚げ食べてれば良かったあああああ！！！」

三人はかなり失礼なことを叫んでいるが、これは以前の横島を知っているからだ。

横島は女の子が好きだ。

横島は女の子が好きだ。

横島は、女の子が大好きだ。

もちろん美女も好きだ。美熟女も嫌いじゃない。美少女だって将来的には範囲内だ。

美少女に飛びかかる。セクハラをする。卑猥な発言をする。

それが横島だ。横島のナンパの仕方だ。

初対面の女性に

「生まれる前から愛してました。」

とか真顔で言える男、否、漢だ。

時には

「おっ嬢さああああん！！ この俺と熱い、熱いベースをおおおお！！ というか貴女と一発！！」

とかだつて言っちゃ困ったさんだ。

エロ本だつて大量に持っている。たまに捨てられたりすることもあるが、いつの間にか大量に購入している。AVも然り、だ。

それに横島の霊力源は煩惱で、最も出力を高めることが出来るのは性的な刺激だ。だからこそ横島は煩惱少年だったわけなのだ……。

そんな横島が、エロ本を持っていなかった。

「この前先生の部屋と一緒に掃除して、ついでに家捜ししたけど本当に無かったでござるよ？ えーぶいとか言うのもそつでござる。」

沈黙。

さつきまで騒々しかった三人がいつせいに黙り込んだ。それだけでなく、真剣な顔でそれぞれの意見を出す。

「……流石にそれはおかしくない？ たとえヨコシマがセクハラを自重してるんだとしても、自宅でくらいなら見たり読んだりしてもいいはずだし……。」

「もしかして、女の子に興味が無くなった……とかは……？」

「それはないない。だって、この前横島君たら、空を見上げながら『女の子っていいなあ……。ありがとう、神様。女の子を創ってくれて……。』って、物凄い爽やかな笑顔を浮かべて呟いていたのよ？」

「それはもう病気では……？」

「それに、横島君の霊力源は煩惱だし、出力だつて上がってきてるのよ？ ならエロ本だのAVだの持ってないはずが……。」

「……ですよねえ。」

「「「うーん……。」」」

結局三人は考え込んでしまった。横島の煩惱についてここまで真剣に考えるのもどうかと思うが、最近少々寝不足気味な横島を心配し  
てのことだった。

「……横島さんが来たら聞いてみますか？ その……え、えっちな  
本は捨てたんですかって……。」

キ又は顔を少し赤らめる。流石に恥ずかしいようだ。

「ま、それはシロの役目よね。」

「何ででござるか？」

「それはね、シロがヨコシマの弟子でね、ヨコシマにね、一番信頼  
されてるからなのよー？」（超棒読み）

その台詞を聞き、シロは舞い上がった。  
単純である。

そんな風に賑やかにはなしていると、屋敷全体から声が響いてき  
た。

『美神オーナー。横島さんがいらっしやいました。』

その声は屋敷に宿る人工霊体『渋鯖人工幽霊一号』である。

元々霊力源である霊能者が現れず朽ち逝くのを待っていたのだが、

紆余曲折を経て美神令子をオーナーとし、何とか『生き延びる』ことが出来た。そんな彼が横島の来訪を告げる。

「噂をすれば何とやらってね。それじゃ、本人に話を聞いてみましょうか。」

美神はそう言っただけで席から立つが、人工幽霊一号が待ったをかける。

『その横島さんなのですが、どうも様子がおかしいのです。』

「……？」

その言葉に皆は首を傾げる。

一体どう様子がおかしいのだろうか。

正直横島の様子はいつもおかしいと言っても過言では無いのだが…。

『どうもひどく憔悴しているらしく、ピートさんが付き添いをなさっています。』

「先生が……でござるか!？」

シロは人工幽霊一号の言葉に驚き、大声を上げる。  
タマモは眉に皺を寄せ、うつむき加減に考え込む。

「と、とにかく上がってもらいましょう! 何かあったなら休んでもらわないと……!」

キヌは美神に進言する。一体横島に何があったのか?

それだけがキヌにとっては心配だった。

「……横島君を上げてちょうだい、人工幽霊。ここまで来れたんだから大丈夫とは思うけど、とりあえず二人に話を聞かないと……。」

『了解しました、オーナー。少々お待ち下さい。』

人工幽霊一号の声が数秒途切れる。

その後、玄関の扉が開いた音がした。

そして、美神達の部屋に横島とピートが入ってくる。

「おはようございます、美神さん。おキヌちゃん、シロタマ。」

「お久しぶりです、皆さん。」

横島は顔を青ざめ、ピートに肩を貸して貰っていた。

その姿に美神は驚き、キヌは慌てて横島をソファに座らせる。

タマモは何も言わないが、横島の額に浮かぶ汗を拭いてやり、シロは横島に「元気が出るでござられ!？」と少々混乱しながら骨付き肉を勧めた。

もちろん横島は食べれなかった。

それから数分後。

美神達は横島の話聞いた。

今まで見た主人公達が居る夢、そして先程見た、『自分が主人公になっている夢』の話。

「夢の主人公の感情が流れ込んでくる……。巨大ロボットに乗ってる夢……。何かに追われる夢……。ねえ。」

美神は話を聞き、腕を組みながら思案に暮れる。

「しかも、そのときそのときの感情がとても鮮明に浮かんでくる……ですか。」

キ又は横島を心配しながら、答えを出そうとする。

「横島さんは授業中に居眠りをしていたのですが、急に魘され出したと思つたら、叫び声を上げて飛び起きて……。」

ピートは苦い顔をしながらその時のことを思い出す。

「しかも、夢の時の怖いって感情が残ってて、皆の前でボロ泣きしちゃって……。今思い出しても怖いんすよ。化け物が後ろから追ってきて……。」

俺はGSだからさういうのは平気かと思ってたんすけど……。」

横島は夢の化け物を思い出し、体を震わせる。

歯の根が合わない。

ガチガチと音がする。

背筋が凍る。

恐怖が蘇る。詳細に、鮮明に、克明に。思わず両手で体を抱きしめる。

そんな横島の様子を見て、美神は考える。

一体何故そうなったのか。

夢。

ヒントはこれだろう。

そして答えも恐らくこれだ。

夢の主人公。

その感情。

流れ込んでくる。

……追体験？

……夢の主人公の記憶を……？

美神はまだハッキリとしないまま、意見を出してみる。

「……………横島君は、もしかしたら、波長が合う誰かの記憶を『夢』という形で追体験しているのかも……………」

「追体験……………ですか？」

「……………」

ピートは少し混乱したような顔をしたが、横島は違った。

「やっぱりって顔してるわね、ヨコシマ？ 心当たりでもあるの？」  
静観していたタマモが横島に尋ねる。

横島は何となく、と曖昧な返事を返した。

とにかく原因さえ分かれば対処法も分かる。  
つまり……。

「寝なければ良いのでござるな！」

自信満々に胸を張るシロ。

最近少し成長し、女の子特有の膨らみが目立ってきた。  
横島はその膨らみを見ながら何言ってるんだこいつはと思った。

「寝なきや死ぬでしょ、バカ犬。もう少し考えてから発言しなさい。」

タマモはやれやれといった感じでシロを見やる。  
それに怒るシロ、宥めるキヌ、苦笑する横島。  
いつもの風景だ。

美神はそれを見ながら自分なりの意見を言う。

「要は夢を見なければいいんだけど……。生憎私はそんな霊具は持  
つてないわね。それより、その波長を何とかしないと駄目ね。親父  
の仮面、ママに言ったら用意してくれるかしら……？」

美神は精神感應能力者用の制御装置を考えるが、横島はそれを否定

した。

「いえ、実はタイガーに借りことがあったんですけど、全然効果が無くて……。文珠で結界を張っても駄目でしたし……。」

「文珠でも駄目!？」

その言葉に全員が耳を疑った。

文珠。

横島の『切札』

神の如き力を奮う最強の霊具。

今まで幾多の危機を乗り越え、数多の敵を葬った、横島の『鬼札』  
使い方次第では、如何なる神魔をも打倒する。

それをを用いても、夢を見る。

感情が流れ込んでくる。

横島は、正直お手上げだった。

まだ『決定的な何か』を見ていないというのは何故か分かるのだが、  
このままではそれに至るまでに夢に精神を殺されかねない。

おかげで煩惱もあまり沸いてこず、性欲を発散しようとする気すら  
起こらない。

「そんな……文珠でも駄目だなんて……。」

キ又は両手を口元に持って来ている。  
それほど衝撃が大きかったようだ。

「寝ないのも駄目、制御装置も駄目、文珠でも駄目では……。」

打つ手が無い。

「せんせい……。」

シロは目に涙を溜め、横島にすり寄る。

横島の苦しみを人狼特有の嗅覚と、それ以外の『女の嗅覚』で読み取った。

少しでも、少しでも苦しみを和らげようと体を寄せる。

横島はそんなシロを見て苦笑を浮かべ、頭をそつと撫でた。

タマモはそんな二人を見て、少し複雑な心境になる。何故そうなるかは自分でも分かっていないが、その感情を内に閉じ込め、横島の体のシロとは反対の側に身を寄せた。

美神は考える。

どうすればいいのか。このままでは横島が精神衰弱で、夢に殺されかねない。

前世の恋人を、現在の弟分を、未だ秘めたる想いを打ち明けずに奪われてたまるものか。

まだ横島は私に相応しくはないが、どんどん理想に近づいて来ている。

ならば、それをどこの馬の骨とも知らない『夢の主人公』とやらに奪われてたまるものか。

横島は考える。

この先どうすればいいのか。  
夢に殺される？

このままでは確実だと言えるだろう。

横島は制服のポケットに手を入れる。

小さな、小さな箱に手を触れる。

その中にはとある『霊破片』が入ってあった。よっぽどのことが無い限り、肌身離さず持ち歩くそれは、箱の中で、弱々しい光を放っていた。

しかしそれは、その霊破片が横島を案じているような、優しい、柔らかな光だった。

やがて美神は決断をする。

ここで考えても仕方がない。打つ手が無い。  
ならば、もっと上の存在ならば？

人間とは、『格』の違う存在ならば、何か分かるのではないか。

美神は決断をする。

「よし、こづなったら……。」

美神の言葉に、皆振り向く。

美神は少し笑みを浮かべながら、答えた。

「困った時の、神頼みといきましょう。」

その一言に、シロとタマモ以外は皆ハツとなった。

「そうか、僕達だけでは打つ手が無くても、神族  
小竜姫様達  
なら何か分かるかも！」

「しかもヒヤクメ様だっているはずですし、もしかしたらジークさん達もいるかも知れません！」

皆に希望が戻ってくる。

「何か分からんが、それで先生が助かるんでござるな!? 良かったでござるー！ー！ー！」

シロなど号泣している。

タマモも、口には出さないが、どこかホツとしている。

美神はうんうんと頷いた。

皆が騒がしくなるのを見て、手をパンパンと鳴らし、注目を集める。

「とにかく、今から妙神山に向かいます。ピートには悪いけど、

念のために唐巢神父や他の皆にも話をしておいて。何か他にも解決方法があるかもしれないから。」

「はい、分かりました。横島さん、とりあえず横島さんは明日から二三日休むと学校に連絡をしておきますね。」

「ああ……。頼んだ、ピート。授業のノートはよろしく。」

ピートは美神に言われた通り、唐巢神父、小笠原エミ等知り合いのGSに話を聞くために帰っていった。

妙神山へ向かう準備は他の皆がしてくれている。ありがたいと思いつつ、横島は目を閉じ、息を吐く。

恐らく、妙神山でも収穫は無いだろう。

横島はそう思った。

否、確信していた。

他のことはともかく、この『夢』のことに關しては、そう思えるのだ。

何か、もっと上の『存在』

神族や魔族でもない。

もっと別の存在。

何かは分からない。

分からないのだが、これだけは言える。

この『夢』に関係しているのは、もっと上の、おぞましい  
『何か』だと言つことだ

用意が出来、美神達一行は妙神山に向かう。

そこで何が分かり、何が分からないのかは未だ不明だ。

一縷の希望と多量の不安を抱え、舞台は妙神山へと移り変わる。

箱の中の『霊破片ノ蛭』の光が、少し強くなった

第一話

『制御出来ない感情』

了

## 第一話（後書き）

巨大ロボットって良いよね。ロマンだよね。

ヒロインは一体だれなのでしょう？（邪笑）

横島君って、普通にしたら美形だと思います。  
横島君と是非友達になりたい。

感想もお待ちしています。

それではまた次回。

## 第二話（前書き）

お待たせしました。

第二話です。

それでは、お楽しみ下さい。

ところで、デモンズインのエセルドレーダってめちゃくちゃ可愛いよね。

## 第二話

### 妙神山。

日本有数の霊山にして、神の住まう山。  
鬼にして妙神山修行場の門番、右の鬼門と左の鬼門。

修行場の管理人、小竜姫。

そして、小竜姫の直属の上司であり、師匠。世界にその名を轟かす  
魔猿、『斉天大聖』孫悟空。

かつて世界に宣戦を布告した魔神アシクタロスの娘の一人、蝶の化  
身パピリオ。

以上の神魔族が妙神山修行場に住んでいる。

たまに遊びに来る友人として、神族の調査官ヒヤクメ、魔界正規軍  
の軍人ワルキューレ、その弟ジークフリート、パピリオの姉ベスパ  
がいる。

今はデタント（緊張緩和）の時代。

神族と魔族が手を取り合う時代。

勿論それは、人間や妖怪ともである。

## 第二話

### 『妙神山へ』

#### 妙神山の麓。

そこに一台の大型車が止まる。扉を開け、現れたのは五人の人。即ち、美神、キヌ、横島、シロ、タマモの五人である。

「着いたわね……。後はここを登っていくだけね。」

美神は妙神山を見上げながら言う。

元々は横島の文珠で転移をしようとしたのだが、横島の精神の衰弱具合が思ったよりも酷く、二個の文珠の同時使用すらも出来ない状態だった。

なので麓までは車で、そこからは徒歩で登山という形になる。

横島は多少休んだおかげで体力も精神力も幾分か回復し、何とか修行場くらいまでなら元氣も持つだろう。元々二十〜三十キログラムはあるうかという荷物を背負い、頂上まで汗一つかかず、息一つ乱さない程の体力があったのだ。それにシロとタマモ、美神もいる。

慎重にいけば、横島ならば問題は無いであろうと思われる。

（皆さんは真似をしないで下さい。危険です。）

基本的に他のGSに比べて体力の無い方のキヌは、シロ、タマモの両名にサポートをされながら登ることになる。

「ここが妙神山でございますか……。出来れば、純粹に修行という形で来たかったでございますな……。」

シロは横島に寄り添いながら呟く。横島を危険にさらさないよう、ちゃんと気を付けながら山を登っていく。

シロがぼやくのも無理はない。妙神山修行場は日本でも最高の修行場であり、GS見習いとして、侍として、何より横島の弟子としてシロは強くなりたいと思っている。

しかも修行場の管理人は神剣の使い手。

修行で来たかったというのは紛れもない本心だ。

「何言ってるの。今のあんたじゃまだまだ駄目よ。修行場にまでなら辿り着けるだろうけど、今のあんたの実力じゃ鬼門達にも劣るわよ？ 地道に修行してなさい。」

「はいでござる……。」

シロは美神の厳しい言葉に少ししよげながらも足は止めずに登っていく。

鬼門達は確かにやられる場合が多いが、それでも鬼の一族である。

パワー・タフネス・戦闘経験はシロの上をいく。美神のような反則スレスレの手には弱いが、正攻法でいけばそれなりに強い。

ただ単に今まで戦ってきた相手が悪かっただけなのである。

タマモはキヌの手を引き、ゆっくりと登っていく。美神達とは一定の距離が空いているが、密集しすぎるのも危険なので、これはこれで問題は無い。

タマモはキヌの顔を見る。汗をかき、息が乱れてきている。山を登り始めもうすぐで一時間と三十分。キヌの体力を考えれば、そろそろ休憩を入れるべきだろう。横島だって体調は悪いのだ。休憩は多く取った方がいいだろう。そう考えたタマモは美神に休憩を申し入れる。

「ねえ、美神。そろそろ休憩にしない？ 修行場まではまだまだあるだろうけど、ヨコシマも本調子じゃないし、おキヌちゃんだって辛いだろうし……。」

タマモは最後の方はキヌの額の汗を拭ってやりながら言う。やはりこの道無き道を登っていくのは想像以上に厳しいようだ。

美神はタマモの意見を聞き、キヌと横島の顔を見る。横島はまだ余裕がありそうだが、多少息が乱れていた。

普段の姿からは想像が出来ない。

キヌは額にびっしりと汗をかき、息もかなり乱れている。これは休憩を入れるべきだろう。

「分かったわ。それじゃあ十分〜十五分程休憩にしましょう。ちゃんと水分も取るのよ?」

美神はそう言って背負っていたリュックから水筒を取り出し、中の水を口に含む。

普段なら横島に持たせていただろうが、今の横島にそれは出来ない。昔の美神ならばそれでも持たせていただろうが……。横島やキヌ達との触れ合いで、美神の性格はかなり丸くなったようだ。

「ひゃあ〜〜……。やっぱり、大変、ですねえ……。」

キヌは近くにあったやや小ぶり岩に座り込み、ふうふうと息を吐きながら声を出す。

ちらちらと横島に目をやり、自分同様に体力を極端に消耗していないか、心配になっているようだ。

タマモはそんなキヌを見やり、汗を拭ってやつたり、持っていたペットボトルの水を差し出し、水分を補給させる。

さすがにシロやタマモは妖怪らしく余裕で、美神同様にほとんど体力を消耗していないようだ。

シロは山の頂を見据え、此処からの残りの距離を計算している。

山育ち故の特技で、今のペースで行けば、約二時間半程で辿り着けるだろうと当たりを付ける。

普通の人間では考えられない程のハイペースである。

現在の時刻は午後七時半をとくに過ぎている。

辺りもかなり暗くなってきた。本来ならば夜間の登山は遠慮しておきたいのだが……。美神達は最後まで行くつもりだ。GSとしての『

『靈感』が疼く。

今日中に辿り着かないと、何か悪いことが起きるだろうという予感。

それがどのような物かは分からないが、横島に関係していることなのだろうことは分かっている。

何かが囁きかけるのだ。

その悪い予感は、『横島にとって』の悪い予感なのだということを。

横島は皆を見て、考える。

迷惑をかけている。

最近はやんとGSとしての資料集めや修行、美神の負担を減らすために色々な勉強もしている。

強力な霊や魔族、妖怪と対峙しても、冷静に対処出来るような知識を得るため。少しでも事務所の経営を助けるための知識を得るため。自分の力を高め、泣いている誰かを助け出す『力』を得るために。

馬鹿をやりながら、騒ぎながら、泣いたり喚いたりしながら、セクハラしながらも頑張ってきた。

全ては、あの日のような想いをしないため。

誰かを助けるのに誰かの犠牲を出さないために。

そんな、残酷で、悲惨で、救いがなくて、憤怒にまみれ、情けなくなる、『後味の悪い思い』をしないために。

ちよつとだけ成長したと思っていた。

大人に近づいたと思っていた。

でも、まだまだだ。

また自分はこうして、誰かに迷惑をかけている。

『自分のために』、『誰かに迷惑をかけている。』

そんな自分が、嫌になった。

そんな時　　。

「　何て顔してるのよ、ヨロシム。」

「……………タマモ？」

タマモは横島を見る。

何か俯いて考えているようだ。

その表情は、苦虫を噛み潰したかのようにも見える。

また、馬鹿なことでも考えているのだろうか？

そう思える。

ヨコシマは変な奴だ。

バカでマヌケでうるさくて騒がしくてお調子者でコンプレックスが強くエッチで変態でセクハラ野郎で。

でも優しくてたまに賢くてたまにカッコ良くていつも守ってくれて助けてくれて。

どっちが本当のヨコシマなのかが分かりやしない。

あるいはどちらも本当のヨコシマなのかも知れないが、そんなことはどうでもいいのかも知れない。

どっちにしても、ヨコシマの近くは気が楽なのだ。

自然なままで、変な意地をはらなくてよくて、自分自身をさらけ出せる。

シロ達ではそうはいかない。

シロは必要以上に突っかかってくるし、おキヌちゃんは天然が入ってるから少し心配だし、美神は何というか、近くにいると少し緊張するし。

それでも大切な家族であるのは間違いないが……口うるさい妹、ドジなお姉ちゃん、しっかり者だけど、少し怖い姉……といった感じだろうか。

その点ヨコシマならモーマンタイだ。

変に気を使う必要もないし、最近は頼りがいも出てきて心配する必要もあまりないし、近くにいて緊張するどころか、逆に心が落ち着いて安らげる。

それに何よりきつねうどんを奢ってくれる。

ヨコシマ行き着けのうどん屋のきつねうどんはとても美味しい。

まだまだ短い人生経験の中でもぶっちぎりでナンバーワンだ。そんなうどんをおかわり有りで奢ってくれるのだ。

「しゃーなーな。それで最後にしろよ?」

と、笑顔で言ってくれる。

言うなれば、面倒見の良いお兄ちゃんか。

私は、そんなヨコシマの笑顔が好きなのだろう。

だから、ヨコシマが何かを考えて暗い顔をしているのが我慢ならなかった。

大方、自分が皆に迷惑をかけているのが嫌なのだと考えているのではないだろうか。

だとしたら、ヨコシマはきつとバカなのだろう。

こんなのは迷惑なんかではない。

まともに口に出して話すのなら恥ずかしいが、心の中でなら言える。

大事な『家族』のためならば、このくらいのことなど迷惑なんかではないのだ。

現代に蘇った私。

現代に生まれ変わった私。

殺生石の中から、唯一人で『産まれた』私。

ひとりぼっちのまま殺される恐怖を味わった私。

そんな私に、家族が出来たのだ。

心から信頼しあえる、気が置けない関係。

その『家族』の一人が暗い顔をしている。

ならば、それを何とかするのが家族というものだ。

本来狐は群れないのだが、こんなのも良いと私は思う。

皆ひとりぼっちじゃ駄目だ。

だから、今のヨコシマが寂しげに、『ひとりぼっち』に見える、見えてしまうのは、ヨコシマの心の在り方が少しいつもと変わってしまっただからだろう。

だから私は。

だから私は、ヨコシマに話しかけた。

「……………タマモ？」

横島はタマモに話しかけられ、どう答えたらいいかを考える。

自分はそんなに酷い顔をしていたのだろうか？

確かにポーカーフェイスとは程遠いが、それでも思いを顔に出したつもりはなかったのだが……。

72

「言つとくけど、ヨコシマが考えるようなことなんて筒抜けよ？  
顔に出さないようにしてたんでしょうけど、まだまだね。」

タマモはフンと鼻で笑いつつ言ってくる。

ご丁寧に一歩一歩ゆっくりと近づきつつ、手振りを交えながら、だ。

「な、何だよ……………」

何となくバツが悪くなった横島はそっぽを向いて、口を尖らせる。  
その子供っぽい仕草が、横島にはよく似合っていた。

タマモは、横島のすぐ側にまで歩み寄った。

「……大方、皆に迷惑をかけてるとか、そんな自分が嫌になったとか……。」  
「そんなこと考えてたんでしょ？」

「な……………」

凶星だった。

しかし、それを悟らせまいと言葉を発せようとするが、思わず言葉に詰まってしまう。

横島の身長は一七〇センチメートル中盤であり、タマモはその横島より約頭一つ半程背が低い。

タマモの頭は横島の胸元程の位置であり、自然と横島の顔を下から見上げる形になる。

未だ幼い外見と言えども、その容姿は最高レベル。流石の横島も、上目遣いのタマモにドギマギしてしまう。

「言っとくけど、こんなのは迷惑なんかじゃないわよ。」

「……………え？」

その妙に遅い反応に、自然と笑いが込み上げてくる。

だからか、タマモは先程の想いを話すことにした。

皆に対する想い。

横島に対する想いを。

「……………『家族』……………か。」

横島はぽかんとした表情で呟く。

それに対し、タマモは勝ち気な笑顔で答えた。

「そ。だからさ、あんまり考え込むんじゃないわよ？ ヨコシマはいつも通りバカでマヌケでお調子者でないと、こっちの調子が狂っちゃうんだから。」

最後に舌をべーっと出す。

それを見た横島は、その考えを聞いた横島は。

不意に、笑いが込み上げてきた。

「……………くくっ……………。なるほどな、そうかそうか……………。」

口元を手で押さえ、肩を震わせる。

そんな様子を見たタマモは、少し顔をムツとさせる。

「ちよつと、そんなに笑うことないじゃない……………。」

少し頬を膨らませつつ、また横島の顔を覗き込む。  
その瞬間。

「うりゃ。」

「ふみっ!?!」

頬を、両側に引っ張られた。

「そらー悪かったなータマモ。お兄ちゃん勘違いしちゃってたか?」

「ふにゅにゅにゅにゅ!?!」

「おおー、やーらかくてよく伸びるなー。」

「ふにゅあー!?!」

その後十数秒頬を弄ばれ、タマモの頬は少し赤くなっていた。  
タマモは涙目になりつつも頬をさする。

「うっ……。ヨコシマに弄ばれた……。」

「人聞きの悪いことを言うな。」

横島はタマモの頭にそっと手をやり、優しく撫でる。

「……ありがとな。」

そして、誰にも聞こえないように、小さな小さな声で感謝を述べる。

横島はタマモに聞こえないようにしていたが、当然妖狐であるタマモが聞き逃すはずもなく。

「んんんんん？ なあんか言った、ヨコシマ〜〜？」

ニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべながらからかわれる。

その顔を見た横島は優しく撫でるのを止め、

「なんでもねえよつ。」

ぐしゃぐしゃっと頭を少し乱暴に撫でる。

「うきや〜〜っ！？ ち、ちよっと、髪が、自慢のヘアースタイルが〜〜！！」

何とも賑やかな二人である。

横島も、ようやく元に戻ったようだ。

シロとキヌは、そんな二人の様子を指をくわえて見ていた。  
やがてシロは我慢出来なくなったのか、

「先生——っ！！ 拙者も弄んでくだされ——っ！！」  
と突貫していった。

「お前も人聞きの悪いことを言うな——っ！！ ワイはロリちゃ  
うんや——！！！」

「シシシシロちゃん落ち着いて——っ！？ それは女の子が言って  
いい台詞じゃないわ——！！！」

本当に賑やかである。

美神は皆を見て思う。

(中々、良い家族チームになってきたわね……。)

今の喧騒を見て思う。  
もし自分に年の近い兄弟がいたら、こんな感じで毎日が過ぎていく  
のだろうと。

天然な妹。  
元気一杯な妹。  
クールでしっかり者の妹。

そして、バカでスケベな、面倒見の良い弟。  
妹達にとって、良いお兄ちゃん。

そして、意地っ張りでお金が大好きな、皆のお姉ちゃん。

そんな家族<sup>チーム</sup>。

孤独な青春を過ごした美神は、今こうして『家族』といわれることを嬉しく思った。

もちろん自分にも他の皆にも家族はいるが、これも一つの家族の形なのだろう。

血の繋がりでなく、『絆』で繋がった家族達。

こちらとて、本当の家族なのだ。

そして数分後。

「はいはい、そろそろ出発するわよ。辺りも暗いけど、そんなだけ元気なら問題無いでしょう。」

手をパンパンと鳴らし、美神は皆を促す。  
皆は一斉に頷き、修行場を目指す。

途中、少し危ない場面もあったようだが、皆の力で何とか乗り越え、ついに一行は辿り着く。

道が開けた。

視線の奥には遠くにあるせいで小さく見える、巨大な門。ついに、辿り着いた。

ここが、『妙神山修行場』

。

了。

## 第二話（後書き）

デモンベインは？

ねえ、デモンベインは？

すみません、まだ出てきません。

もちよっと待って下さい。

ところで、デモンベインのマルってめちゃんこ可愛いよね。

感想お待ちしております。

### 第三話（前書き）

お待たせ致しました。

第三話の投稿です。

今回は横島君が変わった理由が語られます。

では、一言。

ルシオラファンの皆様、大変すいませんでしたあああああ！！

### 第三話

妙神山修行場。

日本における最高の修行場の一つ。

その門の前に、五つの人影があった。

即ち、横島、美神、キヌ、シロ、タマモの五人である。

「ようやく着いたわね。……横島君、おキヌちゃん大丈夫？」

「……な、何とか、大丈夫ツス……。」

「ぜ、全、然つ、はひつ、ひいつ、だいじょ、じょ、じょぶ、です  
よっ、みか、みみ美神さんっ、はひつ、はひつ。」

横島はともかく、キヌはもう見るまでもなく疲れきっている。  
流石の美神もこれには汗を垂らしている。

「……おキヌちゃんは体力をつけなさいね……。」

美神はキヌに一言だけ伝え、妙神山修行場の門に目を向ける。

くお~~~~。

「……………」。

すび〜〜。

「……………」。

門には鬼の顔がついている。

妙神山修行場の門番、右の鬼門と左の鬼門の顔だ。

その顔はいかにも鬼といった、中々に厳つい顔だ。

しかし、その厳つい顔も、鼻から出ている鼻提灯のせいで台無しだった。

「寝てるっすね。」

「寝てるでござるな。」

「寝てるわね。」

「な、寝て、ます、ねえ……………」。

鬼は寝ていた。

「……………」。



それが自分達。

来る日も来る日も門番として、修行に訪れる人間達を叩き、殴り、潰し、帰す。

そこには感情も何もいらず、ただただ機械的に日々を過ごすだけだった。

当時の修行場管理人もそれを望んでいた。

只の道具として鬼門達を扱っていたのだ。

しかし、そんな日々も終わりを迎えることになる。

管理人が変わった。

そう、小竜姫が新しい管理人になった。

小竜姫は鬼門達をただの門ではなく、道具ではなく、命ある者として扱ってくれた。

自分達に食事を作ってくれ、自分達の体を磨いてくれ、更に自分達に名前をつけてくれた。

( まあ『右の鬼門』『左の鬼門』とそのまんまだったが……。 )

鬼門達は疑問に思った。

何故自分達にこうまでしてくれるのだろう、と。

小竜姫はこう答えた。

「当然です。貴方達は今までこの修行場を守ってくれていたのですから。それに、貴方達は私にとって、この修行場の先輩でもありますから。そんな貴方達を敬うのは、それこそ当たり前ですよ。」

嗚呼、これが。

鬼門達は思った。

嗚呼。これが、この方こそが、我等の女神か。

涙が溢れた。

恥も外聞も無く、号泣した。

小竜姫はそんな自分達の頭を、ただただ優しく撫でてくれた。

とても、暖かい手だった。

初めて誰かの暖かさを知った。

その時から、鬼門達は小竜姫に忠誠を誓うこととなる。

全ては小竜姫の……姫様のために。

我等の『命』はただ姫様のためだけに在る。

姫様の前に敵が立ち塞がるならば、我等がその敵を打ち倒そう。

姫様の命が奪われようとするならば、我等が命を代わりとしよう。

姫様が望むのならば、我等は如何なることも成し遂げよう。

「あが……が……が……」

そんな誓いを思い出していたが、既に鬼門達の命は風前の灯火だった。

荒ぶる美神の靈力は止まることを知らない。

しかし、そんな鬼門達に救世主が現れる。

「あら、何ですかこんな夜更けに騒々しい。」

門をギイツと開いて出てきたのは、妙神山修行場管理人、『龍神』小竜姫その人であった。

「あら、鬼門つたらまたボロボロになって……。相変わらず役立たずですねえ……」

「「あが……が、がががが……」」

鬼門達は仲良く逝った。

「つて、あら？ 美神さん達じゃありませんか。どうしたんですか、こんな夜更けに。」

小竜姫はようやく美神達に気付き、人懐っこい微笑みを浮かべながら歩み寄る。

「……………まあ良いわ。今回は、横島君のことでちょっとね……………」

美神はその様子に少し言いたいこともあったが、それを飲み込んで本題を話す。

その顔は、苦味に顰めている。

「横島さんの……………」

横島の名前を聞き、小竜姫はおかしいと思った。

いつもならここらへんで横島が自分に飛びかかってくるはずだ。

それが、無い。

ふと、横島の顔を見やる。

「お久しぶりです、小竜姫様。相変わらずお美しい……………！ ぼかーもーたまりませんっ！！」

爽やかな笑顔でいつも通りの台詞をのたまう。

しかし、台詞とは裏腹に勢いが全く無く、飛びかかるどころか、顔は多少青ざめ、汗を流し息も乱れている。

いつもの横島からは考えられないその状態。

これはただ事ではないと直感した小竜姫は、真剣な表情で皆を中へと案内する。

「……初めて見る方々も居ますが、どうやらただ事では無い様子。良いでしょう、中へとお入り下さい。ちょうどヒヤクメやジークさん達もいらつしやいますから。」

そう言つて前へと歩き出す。

美神達五人は頷き、小竜姫の後へと続く。

鬼門達は傷もそのままに、ボロボロなまま放置された。

その目元が光つたのは、もしかしたら涙が流れていたからなのかもしれない。

無言で歩く一行。

母屋にたどり着こうとした、その時。

「ふわぁ……。どうしたんでちゆか、小竜姫？　なんか爆音が聞こえたでちゆよ……。？」

目元をパジャマの裾でこしこしと擦り、眠そうに欠伸をしながら現れたのは、横島の妹のような存在で、蝶の化身、アシユタロスの娘の一人、パピリオであった。

「……パピリオ？」

横島は彼女の名前を呼び、身を乗り出す。久しぶりに彼女の顔が見れるからか、若干嬉しそうに見える。

「あ……………！」

対するパピリオは目を見開き、驚きの声を上げる。

次第にその体はフルフルと震え、目には涙が溢れてくる。

やがて堪えきれなくなったのか、パピリオは思い切り勢いをつけ、横島の胸に飛び込んだ。

「ヨコシマ……………！！ 会いたかったでちゅよ……………！！！！」

「げぶおはああ……………！！！！？」

若干高度が足りず、鳩尾にパピリオのタックルが決まった形になった。

「先生……………！？」

「横島さは……………ん!？」

「ヨコシマ……………!？」

これには皆仰天であった。

しかし、驚いている暇などない。

横島は夢のせいで気力、体力共に衰弱していた。それに加え、妙神山修行場までの道のり。

さらにパピリオの強烈なタツクル。

自分の腹の辺りにすり寄って大泣きしている妹分には悪いが、横島は意識を保てなくなった。

「パピリオ……。次からはもっとおしとやかに飛び込んでくれ……。」

それを口に出すのが精一杯。

横島は白目を向いて気絶してしまった。

「先生……!? おのれ、よくも先生を……!!」

「うるさいでちゅよ、この犬……!!」

「横島さ……ん！ 起きて下さ……い!!」

「ヨコシマ……!! 寝たら冗談抜きに死んじゃうわよ……!!」

シロは叫びパピリオに向かったが簡単に吹き飛ばされ、キヌは気絶した横島を見て泣き叫び、タマモは横島の頬をビタンビタンと叩き、

起こそうとする。

「.....ハア。」

そんな喧騒を見て、美神は額に手をつき、溜め息を吐いた。

### 第三話

『ツライゲンジツ』

それからややあつて。

美神達は居間に居た。

そこには美神、キヌ、シロ、タマモ、小竜姫、パピリオ、ヒヤクメ、ワルキューレの八人が居る。

横島はパピリオのタツクルで気絶したため、今は客間で寝かされて

いる。当初は美神以外の事務所メンバーが横島の看病に立候補したが、小竜姫は皆の話を聞きたいと言い、その代わりにジークフリートが横島の看病をすることにした。

「……最初に聞いとくけど、なんでワルキューレ達が居るわけ？」

美神は当然の疑問を出す。

小竜姫は修行場管理人、ヒヤクメはちよくちよく遊びに来ている。パピリオはここで修行。

しかし、ワルキューレとジークフリートは魔界正規軍に所属しているため、滅多なことでは妙神山に来る理由が無い。

その疑問に答えたのはヒヤクメだった。

「実は、上からの命令で海に沈んだ『究極の魔体』の残骸の回収をしていたんだけど、つい二三日前にそれが終わったの。だから今は休暇という名の待機状態なのね。」

何か問題があればすぐに駆り出される。下っ端はつらいのね。」

『究極の魔体』の回収任務。

彼女達が居る理由はそれだった。

美神とキヌはハツとした表情になるが、シロとタマモは首を傾げている。

「……何なのよ、その究極の魔体ってのは……。」

「……気になるでござるな。」

二人は皆の様子から、何か尋常な物ではないと察するが、美神から『また後で話す』と言われ、渋々下がる。

今重要なのはそれではない。

今、最も重要なのは。

「横島のことだが。」

ワルキューレが口火を切る。

「奴はどうしたのだ？ 此処までの道のりで疲労し、パピリオのタツクルで気絶し、聞くところによれば小竜姫にセクハラもしなかつたそうじゃないか。何か悪い物でも食べたのか？」

最後は冗談めかしたが、その顔は真剣そのものだ。

横島の状態を見て、何かがあつたということは理解しているのだから。

その言葉を聞き、美神は皆の顔を見る。皆が美神を見ている。

美神は、ゆっくりと話し出した。

横島の『夢』の話。

『夢の主人公の記憶』と、『逆流してくる感情』について。

「以上よ。それが、横島君が今衰弱している理由。私達はその解決法を探しに来たの。」

美神は小竜姫達を見る。

皆一様に考え込んでいるようだ。

「夢の主人公……。その記憶……。そして、逆流してくる感情……。ですか。」

「何かに追われる夢……。巨大ロボットに乗ってる夢……。」

「女の子の夢……。何かと戦う夢……。何だか無茶苦茶なのね。」

確かにその通りだ。

無茶苦茶で滅茶苦茶で荒唐無稽な御伽噺。

それが、横島を苦しめている夢だ。

「巨大ロボットかあ。関係ないとは思うけど、つい先日、アリゾナのほうで『いつの間にか存在していた』ボロボロの巨大ロボットが見つかったって話を聞いたのね。」

「いつの間にか……。ですか？」

「うん。その地区担当の神魔族が全然気付かなくて、もう何十年も前からあったみたいな状況だったそうよ。」

その話を聞き、美神は頷く。

関係は無さそうだが、巨大ロボットという点では共通している。

「もしかして、そのロボットのパイロットさんが横島さんの夢の主人公なのでは……？」

キ又は律儀に手を上げてから意見を出す。

その意見は合ってそうなもののだが、ヒヤクメが言うには違うらしい。

「ううん。パイロットどころか、人っ子一人居なかったみたい。死体らしきものも無かったらしいし……。」

キ又はそうですかと言い、今度は考え込む。

「……今はロボットの話より、先生の夢を何とかする話をした方が良いのではござらんか……？」

シロは小竜姫やワルキューレ、の圧倒的な『力』を感じ取っているためか、いつもより覇気が無く、些か緊張しながら意見を出した。

小竜姫達はそんな彼女を見て、それもそうだと思い、頭を切り替え、また考えはじめた。

それから数分、ヒヤクメが自分の考えを口に出す。

「……要は夢さえ見なければ良いんでしょ？ でも文珠でもそれは無理だった。でも文珠よりも『強力』な道具だったらどうかしら？」

皆の視線がヒヤクメに集中する。

「昔ね？ 私は『夢』という形で他人の記憶を無意識に見ていた時期があったの。」

『……………なっ！？』

皆は驚愕する。

同じだ。

今の横島とほぼ同じ状況。

「私は当時、今よりももつともつと未熟で、自分の意識とは関係なしに他人の心や記憶を見ていたの。」

ヒヤクメは悲しげな、寂しげな顔で語っていく。

「そんなんだから友達も出来なくてね。強力過ぎる『神眼』のコントロールが全く出来なくて、余りにも鮮烈に他人の記憶を視ちゃって、色んな影響を受けちゃって、自分が自分でなくなっていつて……………」

『自分が自分でなくなる。』

もしかしたら、今の横島もそうなのではないか？

ここ最近の横島の『横島らしくなさ』は、夢の主人公の影響を受けているからでは？

「それもあるけど、それだけじゃない。さっきチラッと横島さんを『視た』けど、横島さんが横島さんらしくなくなってきたのは、

もつと他に理由があるの。」

「それは……？」

美神が代表して聞く。

が、ヒヤクメはシロとタマモを見て、考える。

「……………それはまた後で。私が脱線させちゃったけど、今はさっきの話の続きね。」

美神は渋ったが、それを了承する。ヒヤクメは皆を見渡し、続きを話す。

「自分が自分でなくなつて、ノイローゼみたいになつたときに、私のお父様の上司の方が、とある神具をくださったの。それは、私の『神眼』を完全に封じ込める程の物だったわ。」

「……………つな！？ 本当ですか、ヒヤクメ！」

それが事実ならば、とんでもないことだ。

ヒヤクメの神眼は、本気を出せば文珠の結界すら簡単に突破するほどの代物だ。

それを完全に封じ込めるなど、それこそ正に『神の力』である。

「それをつけたらね、何も『視えなくて』『読めなくて』、とつても嬉しかったわ。だから、それさえ使えば。」

「ヨコシマは夢を見なくなる可能性がある………つてことね？」

タマモの確認に、ヒヤクメは大きく頷く。

ヒヤクメの神眼をも封じる神具。

それならば何とかなるかも知れない。

皆に笑顔が浮かぶ。

「……私は神界に戻って、その神具を取ってくるのね。実家に大切に置いてあるから、遅くても二時間ほどかかっちゃうけど……。」

ヒヤクメは申し訳無さそうに言う。

確かにその時間はもどかしいし、その間に横島がまた夢を見て精神を蝕まれるかも知れない。

だが、希望が出てきたのだ。

今はそれに掛けるしかない。

「それじゃあ悪いけど、シロちゃんとタマモちゃんは横島さんの所に行つて、ジークと一緒に看病をお願いね？　ただ待ってるだけじゃつらいだろうし……。」

「分かったでござる……！」

「……まだ安心は出来ないのね。でも、お願いね、ヒヤクメさん。」

シロは元気に、タマモは心配しながらも応える。

「それじゃあパピリオちゃん。シロちゃんとタマモちゃんを案内し

てあげて。そのままパピリオちゃんも横島さんの看病をお願い。」

「分かったでちゅ。さあ、行きまちゅよ、犬に狐!!!」

パピリオ達は狼でござるとか私はタマモよとか賑やかに居間を出て行った。

美神はヒヤクメをジロツと見やる。

「……………で？ 何である三人を体よく追い出したの？」

ヒヤクメは俯き、暗い顔をしている。

「……………それを話す前に、横島さんが横島さんらしくなかったことを話してみて。横島さんが、いつもと違う言動をしていたとか、そういうのもいいわ。」

「……………ちょっと、ヒヤクメ？ それが何か関係あるんですか？」

ヒヤクメは真剣な表情で頷く。

美神達はそれを見て、自分達が見たことのある、『横島らしくない言動』を話す。

「……………そういえば、最近やけにドクターカオスと仲が良いわね……………。何か科学の本とか、錬金術の本とかも借りてみたいだし……………」

「私が見たのは……………魔鈴さんに、魔法の本を借りたり、魔法について話し合ったりしているところですね……………」

それを聞いた小竜姫とワルキューレは目を見合わせる。

横島が、科学、錬金術、魔法について勉強をしていた？

GSの勉強ならばまだ分かる。  
魔法もまだ理解出来る。

しかし、科学と錬金術。  
これは一体。

「……………ヒyakメ？」

小竜姫が黙っているヒyakメの顔を覗く。

そのヒyakメの表情は、苦虫を噛み潰したかのように、歪んでいた。

「……………それは、その変化は……………」

ヒyakメが搾り出すように声を出す。

「その変わりようは  
ルシオラさんの、  
靈氣構造が影響  
しているのよ。」

沈黙。

沈黙が場を支配する。

そんな中で、美神がようやく絞り出せたのは。

「……………どういふこと？」

やけにぎこちない、一言だった。

「……………さつき、横島さんをチラッと視たって言ったわよね？ それで分かったの。横島さんが『横島さんでなくなってきた』って。」

今度は驚愕が支配する。

誰も彼もが声を出せない。

最初に正気に戻ったのはワルキューレだった。

「……………ええい、勿体ぶらずにさっさと話せ！！ 一体どういふことだ！…！？」

それは、悲鳴にも似た声だった。

皆はヒヤクメを睨むように見つめる。

「……………横島さんを視たとき、彼の靈気構造も視えたの。本来なら横島さんの靈気構造と同質に変化しているはずのルシオラさんの靈気構造が、全く変化せずに、徐々に、徐々に横島さんの靈気構造と一つになって、『全く別の靈気構造』になっていつてるのが……………」

「な……………!?!」

言葉が出ない。

出したいのに出せない。

嘘だと言いたい。

だが言えない。

声が、出ない。出せない。

「横島さんが科学や錬金術、魔法に興味を持ったのは、ルシオラさんの靈氣構造の影響を受けたから。」

横島さんが『横島さんらしくない』のは、横島さんから『別の存在』になりかけているから。

横島さんの靈氣構造とルシオラさんの靈氣構造が一つに溶け合っているのは、どうしてか分からない。

けど、一つ分かったことがあるの。」

ヒヤクメ以外は、言葉を発することが、出来ない。

そして、ヒヤクメは告げる。

残酷な、事実を。

「横島さんの靈氣構造と一つに溶け合って、別の靈氣構造に変化している……………」。

つまり、ルシオラさんは横島さんの子供としても、転生することが出来ないの……………!!」

ヒヤクメは、最後には泣きながら語る。

ルシオラの転生が不可能となった。

その事実は、美神達にも重く重く、のしかかる。

「……………そ、そんな……………。そんなことって……………!!」

キ又はボロボロと涙を流し、体を震わせる。

美神は悲痛な表情を浮かべ、俯き、肩を震わせる。

小竜姫、ワルキューレ共に呆けた表情をし、今の言葉が真実かを思案する。

いや、思案する必要などない。

ヒヤクメが『視た』のならば、それが真実なのだろう。

信じたくはないが……………それが、純然たる事実なのだ。

「……………これが……………」

キ又はぽつりと呟く。



声は客間の方から聞こえてきた。

それが意味することは。

「横島君!?!」

皆は居間を飛び出し、客間に向かう。

すると。

「ぐあぁっ!?!」

ジークフリートが、傷を負った状態で吹き飛ばされてきた。

「ジーク!?!」

ワルキューレはジークフリートを支え、立たせてやる。

「一体どうしたのだ、ジーク! 何が……………っ!?!」

刹那、背筋に這いよる寒気。

濃密な殺気。

異常な殺意。

ジークフリートが吹き飛んできた方を見れば、そこには男が立っていた。





何処とも知れぬ世界。

何処とも知れぬ空間。

何処とも知れぬ場所。

そこに、

『が居た。

『は中空を見て、笑い、泣き、嘲笑い、心の底から愛おしそうに、恋しげに、心の底から口惜しそうに、憎々しげに、とある場面を眺めていた。

「うん、やっとここまで進んだか……。それにしても、ここまでの同調具合。

これは……。もしかすると、もしかするのかな……。？」

『は声を発した。

とても魅力的な少女のような声で、やんちゃ盛りな少年のような声で、精悍な青年のような声で、悩ましげな女性のような声で、噎れた老人のような声で。

その体は不定形。

形を取っては崩れ、崩れては形を取る。

ただ唯一共通しているのは、『無貌』であること。

そして、『無貌』であるのに、燃えるような三ツ目の存在

。

「さあ、忠夫君。見せておくれ、君の行き着く先を。

魅せておくれ、君の行き着く果てを。

君は僕を楽しませてくれるのかな……？

あの　　。「

『混沌』が戦慄した。



「 僕の、お人形さん 。 」

『 混沌 』 は

嘲笑い続ける。

### 第三話（後書き）

ルシオラファンの皆様、大変申し訳ございません。

作者が考えている別のクロスオーバーならばルシオラの救済はあるのですが、こちらの物語ではどうも……。

「光射す世界に、涙を救わぬ正義なし!!」

『御都合主義』 《デウス・エクス・マキナ》 発動にご期待下さい。

それでは感想お待ちしております。

タナボルタでした。

## 第四話（前書き）

お待たせいたしました。

第四話の投稿です。

今回は横島君が見た夢の内容になります。

こんな夢見たくねえよ。  
いやマジで。

## 第四話

夢を見ていた。

嫌な夢だ。

大切なものを奪われる、殺される、犯される／侵される／冒される夢。

教会の礼拝堂で、　　さんが吹き飛ばされる。

さんは祭壇にぶつかり、床を二回、三回と跳ね、力無く倒れた。

『それ』をしたのは少年だった。

人外じみた美しさを持った、中性的な容姿の少年。

少年は金色の髪に手をやり、気だるげな顔をしている。

吹き飛ばした　　さんのことなど、最早目の中に無い。

少年は、『

』と名乗った。

俺は少年に怒りをぶつける。

何故他人を巻き込むのか。

直接自分を狙えば良いではないか、と。

それに対し、少年の答えはこうだった。

『はて、巻き込むとは。』

金色の少年は

さんを指差す。

『あれはあの程度で死なぬだろうし、現に生きている。怒るほどのことでもあるまい？』

『すまなかった、とでも言えば気がすむとでも？ では訊こう。貴公は地を這う虫けらに気をつかいながら道を歩くわけか？』

『生憎、余は虫けらに気をつかいないながら道を歩くほど、神経質ではなくなつてな。』

場面が変わる。

『ンベン』を素手で殴り飛ばし、魔術による光弾で装甲を貫いていく金色の少年。  
彼はつまらなげにしている。

弱い。

弱いのだ。

今回の『』は弱すぎた。  
興奮めもいいところだ。

ならば、『今回』はこの場で終わらせても。

少年は手を翳し、強大な魔力を結集させる。

そして、その圧倒的な暴力を『ンイン』にぶつけようとし。

いや、待て。



その狂ったかのような哄笑は、未だ終わりを告げそうにない。

『どうした、  
？ あははっ、驚いたか？ さあ、どうする？ 死ぬぞ？ 死んでしまうぞ？ 貴公が身を挺し、守ろうとした虫けら共が死んでしまうぞ？』

彼は、亀裂の様な笑みで笑い続ける。

場面が、変わる。

鋼の巨人同士の戦い。

鋼の巨人が、己の刃金を以って、敵の刃金を打ち砕いていく。

守るために／殺すために。



忌々しいほどの白い手が、唐突に『 の腹を突き破る。

更に、突き破った腹を穴を広げて、別の指が生えてきた。

それは手掛かりを求めるように蠢いたあと、少女の腹を掴み、思い切り左右に広げる。

少女の腹は聞いたこともないような嫌な音を立てながら縦に裂け、大量の鮮血が噴き出す。

その裂け目から現れたのは、『金色』だった。

血にまみれた金の髪、均整の取れた人外じみた美しい顔が突き出される。

それは、『母』に比べ、余りに大きすぎる『赤子』だった。

赤子の全身が這い出てくる。

少女の体は遂に限界に達し、やがて 。

なにか、はれつしたようなおとがした。

鮮血の雨が降る。  
血肉の雨が降る。  
骨片の雨が降る。

その中心部に、それは立っていた。

金の髪。

中性的な容姿。

美しいのに華やかさの無い、底の知れない『金色の闇』

彼はすつと顔を上げ、血まみれの髪を掻き上げた。

ゆっくりと、瞼が開く。

金色の眸。ひとみ

忘れもしない、あの姿。

忘れられない、あの姿。

忘れることが出来ない笑みを浮かべている。

そう、あの亀裂の様な笑みを。

ば場、面んががが 変わ わるるるる。

激しい衝撃が俺の体を貫いていた。

それで、失っていた意識が一気に覚醒した。

目を開けると、そこは見覚えのある場所。

『ンベイン』のコックピットだ。

内部は滅茶苦茶に壊れ、ハッチは吹き飛び、モニターはノイズ、計器類はぐちゃぐちゃだ。

外を見れば格納庫。

どうやら空間転移で何とか逃れたようだ。

こんな便利なきが出来るなら最初からやれ。

そう、相棒に文句を言おうとしたが、その当の相棒の姿が見えない。彼女の姿を求め、体を起こそうとしたとき、小さな体が自分に覆い被さっていることに気付いた。

『だ。』

彼女は気を失っているのか、身じろぎ一つしない。

彼女の体に手を回し、軽く揺さぶった。

しかし、彼女はピクリとも動かない。

背中に回した手が、何か『ぬめる』を感じた。

手を見やる。

赤い／紅い／朱い。

それは『血』だった。

血で手が赤く染まっている。

嫌な予感がよぎる。

心がどんとんと凍り付いていく。

彼女の背中へ目をやると、ドレスは破け、血で真っ赤に染まり、いや、そもそも背中など『存在していない』

抉れ、吹き飛び、背骨がハッキリと見えている。



もう崩れないように、崩壊を防ぐために。

しかし、腕の隙間から粒子が次々とこぼれていく。

俺は粒子を必死に掻き集めた。

だがそれはつかみどころがなく、崩壊も止まらない。

だが、それでもなお、俺は集め続けた。

『の欠片を。』

だが、遂に、終に限界がきた。

彼女の体が光に包まれたかと思うと、俺の腕の中で、彼女が、弾けた。

光の粒子がコックピットに舞い、やがてそれは魔導書の頁となり、宙を舞う。

ひらひらと舞っていた頁は、吸い寄せられるように俺の下へと集まってくる。

手を差し出すと、それは一枚一枚折り重なり、やがて、一冊の古びた書となった。



何故だ？  
何故こうなった？

何が理由だ？  
何が原因だ？

誰のせいだ？  
誰の仕業だ？

決まっている……。

金色！  
金色！！  
金色！！！！

奴のせいだ！！

奴が存在していたからこうなったのだ！！

奴さえ居なければ、こんなことにはならなかった。  
こんな結末は訪れなかった。  
こんな悲劇は有り得なかったはずだ！！

殺す……。  
殺す……。  
殺す……。！  
殺す……。殺す……。殺す……。  
殺す、殺す、殺す、殺す、殺す、殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！

殺してやる！

大いなる獣！！

七頭十角の獣！！

大導師……………！！！！

「マスタアアアアテリオオオオオオオンッッッ！！！！」

#### 第四話

『絶望の夢』

弾き、受け流し、止め、払い、避ける。

次々と繰り出される攻撃を弾き、受け流し、止め、払い、避ける。

その攻撃は熾烈を極める。

(……………速い。)

急所を狙い、突き出される『靈波刀』

(……………鋭い。)

正気を失った状態とは思えぬ程に冷静、冷徹な攻め。

(そして、重い……！)

攻めるは横島。

守るは小竜姫。

普段ならば、小竜姫は横島など軽く叩き伏せるだろう。

だが、今この状況はどうだ？

横島が小竜姫に攻撃を繰り出し、小竜姫がそれを必死に防ぐ。

有り得ない。

通常ならば有り得ないのだ、こんなことは。

小竜姫は上級神族の末席に連ねる者。

その実力は本物で、例外は有れど、今まで数多くの魔族、裏切り者の神族を斬り伏せてきた。

それが、一人の人間に押されている。

未だ本気ではないのもあろう。

正気を失った横島が相手なのもあろう。

しかし、それでもなお隔絶した实力差があるのだ。



横島は霊波刀を振り被り、袈裟切りに打ち込む。

小竜姫はその一撃を受けようとしたが、その攻撃は、小竜姫の剣を『すり抜けた』

「……………え？」

一瞬、思考に気を取られる。

何故すり抜けたのか？

横島の霊波刀を見ると、その形状が刀から籠手へと変化していた。

横島は『栄光の手』の特性を利用し、攻撃の間合いを変化させていた。

横島が怒濤の連撃をしていたのは、小竜姫に霊波刀の間合いを見切ったと『錯覚』させるため。

霊波で構築された『栄光の手』がその姿を自在に変えることを失念していた小竜姫は、己の未熟を恥じた。

だが、もう遅い。

「マスタアアアアテリオオオオオンッ！！」

『栄光の手』は再び形を霊波刀に変化させ、小竜姫に向かい、左斬り上げに振り切られようとしていた。

しかし。

一つの音が響いた。  
火薬の爆ぜる音。

銃声。

「……何があったかは知らんが、それ以上はやらせんぞ。」

横島の霊波刀は銃弾に弾かれた。  
たまらず横島は距離を取る。

小竜姫を救ったのはワルキューレだった。

美神やキ又は小竜姫を圧倒した横島に驚き動けず、シロ・タマモ・パピリオは横島の殺気に恐怖し動けず、ジークフリートは負傷し、ヒヤクメに支えられている。  
彼は太ももに酷い切り傷があり、出血も夥しい。

横島が、やったのだ。

ワルキューレはジークフリートをチラリと見る。

傷は治り始めているが、その速度は緩慢だ。

もう一度横島を、今度は怒気の籠もった目で睨む。

「……油断し、負傷したジークも情けないが、お前はそれ以上だ横島。私の弟を、自らの戦友をお前自身が傷つけたのだ。相応の覚悟は出来ているんだろうな……！！」

ワルキューレは横島の眉間に狙いを定める。

小竜姫はワルキューレの隣に移動し、いつでも動けるように意識を『戦闘用』に切り替える。

一触即発の空気の中、横島の目は鋭く細まり、口端はギチギチとつり上がっていく。

それは、狂的なまでの形相で、ある種凄絶なまでの笑みにも見えた。

皆の背筋に『寒気』<sup>あやけ</sup>が走る。

そのまま横島が突撃しようとして重心を低くした瞬間、廊下の奥からそれは現れた。

「 なんじゃ、騒々しいのう。」

それは、金の輪を頭に詰め、キセルを吹かし、人民服に身を包んだ人語を解する猿。

自らを『天に斉しい』とまで言った魔猿。

小竜姫の直属の上司にして、神界一の武神。

『斉天大聖孫悟空』だった。

「ほ、どうした小僧。やけに猛っておるではないか。」

斉天大聖は軽く笑みを浮かべる。

斉天大聖は何気なく言った一言だが、今の横島には、それは禁句にも等しい言葉だった。

頭の中に声が響く。

あの忌まわしい『金色』の音が。

『猛っているな。どうしようもなく猛っているな、大十字九郎。そうか、そんなにも我が母に情が移っていたか。』

目の前の人物を睨む。

「……………リ、オン……………!!」

「んん？」

斉天大聖は横島に近づく。

何の気負いも無く、ただ自然に。

もはや、横島には斉天大聖が、否、皆がマスターテリオンに見えていた。

「マスタアアアアアアテエリオオオオオン!!」

横島は斉天大聖に襲いかかる。

皆は息を呑む。

が。

「ほい。」

「っ!？」

横島は宙に投げ出された。

何てことは無い。

突進のエネルギーを、上方向へと向けられたのだ。

しかも、手に持つ小さな、キセルで。

「……今は夢も見んくらいに深く眠れい、小僧。手加減はしてやるからの。」

齊天大聖は宙の横島の腹に拳を叩きつける。

横島は吹き飛び、廊下を転がっていく。

(……………何じゃと?)

しかし、横島は体制を立て直した。

口からは血が溢れ、かなり深いダメージを負ったのは明白だ。

再び齊天大聖に襲いかかろうとした次の瞬間、横島の額に棒が叩きつけられた。

横島はもんどり打って倒れ、遂には意識を失った。

自在に伸びる齊天大聖の武器、『如意棒』による強烈な一撃だった。

皆は倒れた横島を見ている。

額は割れ、かなり派手に出血している。

しかし、先程の横島の状態に恐怖を抱き、誰も動けずにいた。

「ほれ、さっさと小僧の手当てをしてやらんかい。このままでは流石に可哀想じゃ。」

その言葉で皆がハツとし、慌ただしく横島の元へ行く。

シロとタマモとキ又は横島をヒーリングし、ワルキューレとパピリオは横島を担ぎ上げ、また客間に連れて行く。

ジークフリートはヒヤクメと小竜姫に支えられ、客間へ治療をしにいった。

美神は何か考え事をしているのか、顎に手を当て、唸りながら客間に入っていた。

そんななか、斉天大聖は己の拳を見やる。

先程の一撃。

あれは確実に横島の意識を刈り取るはずだった。

だが、現実はどうだ？

横島は耐えきり、再び襲いかかろうとした。

それに、拳を叩き込んだ時の、あの違和感。

( ……まさか、僕の拳を霊波の盾で防ぎよるとは…………… )

斉天大聖は拳を開き、ヒラヒラと振った。

「未恐ろしい小僧じゃのう……………」

斉天大聖はどこか嬉しそうに呟いた。

その後、斉天大聖はとりあえず小竜姫達から詳しい話を聞こうと、客間へと入っていった。

『第四話  
絶望の夢』

了。

#### 第四話（後書き）

お疲れ様でした。

横島君が女の子三人にヒーリングされているなか、怪我をしているのに放置されているジーク涙目。

今回は少し短かったかも知れませんか。

しかし話が進みません……！

感想お待ちしています。

## 第五話（前書き）

お待たせ致しました。

第五話です。

そろそろ序盤の佳境に入って来ました。

言葉がおかしい？

はいおかしいですね。

とにもかくにも第五話、お楽しみ下さい。

## 第五話

横島が暴走してから、既に二時間が経過していた。横島は客間で布団に寝かされている。

キヌ・シロ・タマモの三人によるヒーリング、小竜姫による妙神山に伝わる霊薬等の治療で横島の傷は癒え、今は深い眠りについていた。

それこそ、夢も見ないくらいに深く眠っている。

ジークフリートも皆による治療で既に傷は癒え、今は皆と一緒に横島が起きるのを待っている。

美神達事務所メンバーと小竜姫は横島の寝汗を拭いたり、額に湿らせた手拭いを乗せたりと甲斐甲斐しく看病し、ワルキューレはイライラとしながら、パピリオはそんなワルキューレにビクビクとしながらも横島を心配している。

ヒヤクメは齊天大聖、ハヌマン猿神の言葉により、神界に戻り、横島のために『神眼』を封じる神具を取りに戻っている。  
時間的に、そろそろ戻ってくるはずだ。

猿神は腕を組み、目を瞑って胡座をかいている。  
そこから醸し出される雰囲気は、静かな物だった。

シンと張り詰めた空気の中。

「……………ん、んん。」

ふと、横島が身じろぎする。  
皆は横島を注視する。

猿神は目を開き、小竜姫・ワルキューレ・ジークフリートの三人は身構え、その他の面々は息を呑む。

「……………ん……………。……う、は……………」

横島が目覚めた。

目を細め、天井を見る。

見覚えの無い天井。

少し視線を動かすと、美神達事務所メンバー、小竜姫達神魔族が居る。

だが、自分を見る『目』が少し妙だ。

キヌ・シロ・タマモ・パピリオは若干の恐れを。

小竜姫・ジークフリートは警戒を。

ワルキューレに至っては怒りをその目に称えている。

「え……………えつと……………。皆……………？」

横島は戸惑いつつも上身を起こす。

その様子に美神はホッと息を吐いた。

「……………どうやら正気に戻ったようね……………。まあ、目覚めてそうそう  
また襲いかかれても困るんだけど……………」

横島はその言葉に首を傾げる。

正気に戻ったとは　　？

また、襲いかかるとは一体どういうことか　　？

横島がそう疑問を浮かべていると、急にワルキューレが胸倉を掴んで自らに引き寄せた。

「うわった！？　な、何すんだよ、ワルキューレ！！」

「何をするだと……？　それはこちらの台詞だ、この馬鹿者が！！」

ワルキューレにピシヤリと言われ、横島は体をビクッと震わせる。

それが何故なのかを聞いているのだが、頭に血の上っているワルキューレはそれに気付かない。

馬鹿だの阿呆だのと、それこそ子供のような言葉で横島を罵る。頭に血が上りすぎ、言葉が上手く出てこないようだ。

当然今さっき起きたばかりの横島がその罵声の原因に思い至ることなどなく、ワルキューレの言葉に怒りが募っていく。

「な、何だよいきなりワケのわかんねーことを！　俺が何したってーんだよ！！」

横島はワルキューレの手を振りほどき、大声を上げる。

ワルキューレはピタリと動きを止め、その顔を更に険しくしていく。

横島はそんなワルキューレに気圧され少し身を下げた。

他の皆は二人を止めるタイミングを逃したのか、単に成り行きを見守るためか、口を出したりはしない。

「……あれだけのことをしておいて、まさかそんな事を言うとは……。記憶が無いとでもいうのか……？」

ワルキューレは小さな声で呟いた。

それを耳にした横島は、先ほどの疑問を浮かべる。

「……俺が気絶してる間に、何かあったのか？ 何かやっちゃったのか……？」

横島は先ほどの勢いもなく、弱々しく疑問を口にする。

ワルキューレはそれを聞き、やはり顔を険しくした。

完全なる怒りの形相。

美しく整っている顔だけに、それはとても恐ろしく見えた。

「良いだろう……！ 何かあったのか教えてやる……！！」

ワルキューレは横島を睨む。

そして、先ほどの暴走した横島が仕出かした事を話し始めた。

話を聞くにつれ、横島の顔が青ざめていく。

シロ・タマモ・パピリオを恐怖させ、ジークフリートに重傷を負わせ、挙げ句の果てには小竜姫を殺そうとした。

そう、殺そうとしたのだ。

ワルキューレが銃を撃つのがもう少し遅れていたら、小竜姫の命は無かったかもしれない。

それ程までに、あの霊波刀には殺気が籠もっていた。

横島の体がガタガタと震え始める。俯き、涙腺が緩み、歯の根が合わず、視線は一定しない。

やがて顔を上げた横島は縋るような表情をしていた。

嘘だと。

それは何かの間違いだと。

そう言ってほしい。

そんな目をしていた。

「……なあ、ジーク。嘘だよな……？俺が、お前に怪我させたなんて……嘘だよなあ……？」

ジークフリートは目を合わせない。  
辛そうに目を伏せる。

横島の目から涙が溢れる。

それは頬を伝い、落ち、下半身を覆う掛け布団に染み込んでいく。

「……小竜姫様……。嘘だと言って下さいよ……。俺が……。俺が、小竜姫様を殺そうとしただなんて……！」

やはり、小竜姫も視線を逸らしてしまう。

それで気づいた。

気付かざるを得なかった。

それは、本当の話なのだ。

自分が仲間を傷つけ、殺そうとしたのだ、と。

横島の顔が絶望に染まり行く。

小竜姫を。

『女性』を。

『横島忠夫』が『女性』を殺そうとしたと。

それは彼の絶望。

それは彼の悪夢。

それは彼の記憶。

それは彼の古傷。

それは彼の思い出。

あの時の情景が、嫌でも浮かんでくる。

「あ、あああ……！ ああああああ………！！！」

横島は頭を抱え、苦しげに声を出す。

乗り越えたはずだった。

振り切れたはずだった。

それは、単なる思い違いだった。  
それは、単なる思い込みだった。

そうだ。

『アレ』からそう時は経っていない。  
だというのに、そんなに簡単に割り切れる程、  
彼は冷たくはなかった。

彼は、逆だった。

忘れられるはずがないのだ。

そして、乗り越えられていない。  
振り切れていない。

彼は、悲しむのを、未だに止められずにいるのだ。

## 第五話

『ちよつなら。』

ワルキューレは横島のそんな様子に、少しやりすぎたかと、ようやく冷静になる。

思えば、彼は正気を失っていたのだ。

ならば、その時の記憶が無くてもそれは仕方がないのではないか。今更ながらにそう思う。

横島にどう謝ろうか、そう考えながらも手を伸ばし、肩に触れようとす。

しかし。

「……小僧。今のお前さんには酷じゃが、ちと聞きたいことがある。」

猿神の言葉がそれを遮った。

沈痛な顔で横島を見ていた皆は、猿神に視線を向ける。

横島も顔を上げ、猿神を見やる。

涙と鼻水でその顔は酷い物だったが、ここにそれを笑う者など存在しない。

猿神は横島と目を合わせ、こつ尋ねる。

「お前が暴走したのは、察するに夢の内容が原因だと思っんじやが……。」  
小僧、一体どんな夢を見たんじや？」

「……………っ！！？」

その言葉に、横島は目を見開き、一切の動きを止める。

小竜姫は猿神のあまりの問いかけに思わず腰を上げて抗議をしようとしたが、猿神の表情を見てそれを止める。

真剣であり、横島を本気で心配し、悲しみ、何が彼をそうさせたのか。

それを猿神の表情から読み取ったのだ。

小竜姫は横島を心配に思ったが、ここは猿神に任せることにした。周りを見れば、皆も猿神に視線を送っている。

中には怒りの視線や抗議の視線もあるが、口出しはしないようだ。

やはり、皆も横島をあれだけ暴走させた夢の内容が知りたいのである。

横島は俯き、口に出すのを逡巡しているようだった。

事務所メンバーはそれを悲しげに見つめる。

キ又は横島に無理に言わなくても良いと語りかけるが……。

「……………あんがと、おキ又ちゃん。でも、言わないといけないと思う。」

やがて横島は顔を上げ、ポツリ、ポツリと、夢の内容を話していった。

悪夢の内容を。  
絶望の内容を。

「……………まあ、こんな感じっす。」

横島が話し始めて数分。  
場は静まり返っていた。

あまりにも酷い夢。  
自分の愛する者の死に関する夢。

それは、今の横島には殊更に堪えただろう。

横島は更に言葉を続ける。

「最後の……………。最後の、恋人の死ぬシーンの……………。あの子からこぼれていく光が……………。あの、儂い光が……………。何か、『蛍』に見えちゃって……………。  
だから、余計に気が高ぶっちゃって……………。」

横島の言葉に、皆は俯いてしまう。  
ようやく皆も気付いたのだ。  
横島がまだ乗り越えていないことを。  
まだ、苦しんでいることを。  
まだ、悲しんでいることを。

いくら普段通りに見えていたとはいえ、それは自分達がそう思い込んでいたからだったのだろう。  
シロとタマモはよく分からないという表情をしているが、何となく

口に出してしまうのを恐れてしまった。

『まだ』聞けるような状態ではない。

それを悟れただけ、二人は成長したのだろう。昔なら、それでも口に出していたのだろうが。

猿神は眉間に皺を寄せ、考え込む。

何かを口に出そうとしたその瞬間、突然前方の空中にヒヤクメが現れた。

「おまたせ！ 少し時間が掛かっちゃったけど、ちゃんと取ってきたのねー！」

皆は突然現れたヒヤクメをジッと見つめる。

そして、ゆっくりと視線を下にずらしていく。

「……………え、何？ 何なのね？」

ヒヤクメもつられて下を向くと、そこには横島の背中があった。

どうやら、空間転移の際に横島の上方に転移してしまったようだ。

横島はくぐもった声で

「この『駄目神』め……………」

と呟いた。

ヒヤクメは笑って誤魔化すしかなかった。

それから少し。

今までの空気がなあなあになってしまったので、とりあえずヒヤクメが持つてきた『神具』を見ることにした。

それは小指の先ほどの小ささで菱形をしており、額に付けることにより効果を発揮するらしかった。

横島はそれを額に付ける。

と、途端に頭が若干スツキリしたように感じる事が出来る。

「……どう、横島さん？ 変な感じはしない？」

ヒヤクメは横島の顔を覗き込む。

それに対し横島は先ほどの感覚を述べ、ヒヤクメはそれを聞き、頷く。

「だったら多分大丈夫なのね。私の時も同じような感覚だったし。」

皆はホウツと溜め息を着いた。

これならば横島も夢を見ないだろうと。

暴走することも無いであろうと。

『彼女』のことをまだ乗り越えていないことは仕方がない。

アレから時間も経ってないし、何よりも忘れられるはずもない。

心の傷は、ゆっくりとゆっくりと時間が治してくれるのを待つほかないのだ。

皆に若干ではあるが笑みが戻り、空気が暖まって来て、猿神が口を開いた。

「もう時間も遅い。とりあえず、皆は各々の部屋に行き、休息を取った方が良いでしょう。」

万が一のことを考えて僕はここで寝るから、皆はもう寝ると良い。」

その言葉を聞き、皆は視線を合わせる。

確かに妙神山の登山に加え、重い話や横島の暴走。

疲れはかなり溜まっている。

ルシオラのこと気が掛かりだし、何より横島が心配であったが、その横島もかなり消耗しているのだ。

ここは猿神の言葉に従った方が良いでしょう。

皆はそう考え、小竜姫は美神達を別の部屋へ案内していった。

パピリオ達魔族組もそれぞれの部屋へ。

ヒヤクメは横島に神具の説明をすと言って残った。

「……………?」

横島は気付く。

ヒヤクメの目が、赤くなっている。

まるで、つい先ほどまで泣きはらしていたかのように。

そのことについて聞こうか迷っていたが、ヒヤクメは猿神に話し掛けていた。

「斉天大聖猿神様……。どうか、今だけは席をお外し願えませんでしょうか……………」

ヒヤクメらしくない、妙に畏まった言葉。

普段使い慣れていないのがよく分かる、若干不自然な言葉。

それに対し猿神は、いつも通りで構わないと答えた。何か気持ち悪いと。ゆっくり話すといいと言い、猿神は客間を出る。

ついにこの場には横島とヒヤクメの二人だけになった。

ヒヤクメは横島を見つめる。

その表情は、どこか思い詰めたような、悲しげな色に染まっていた。

「横島さん……。落ち着いて聞いてね……。？」

ヒヤクメが神妙に話し出す。

横島は頷き、次の言葉を待った。

ヒヤクメから聞いたのはルシオラのこと。

自分の霊気構造のこと。

転生が不可能だということ。

「……………」

横島は俯いている。

今話すべきではなかったか。

ヒヤクメは今更ながらに後悔する。

しかし、今話さなければ、この先ズルズルと先延ばしにしていつてしまうだろう。

ならばこそ、と想つての行動だった。

そして、もう一つ伝えるべきことがある。

「それから……。横島さんが持っている、小さな箱……。中に入って

いるのは、ルシオラさんの『残り』の靈氣構造ね？」

その言葉に横島はゆっくりと頷き、ズボンのポケットから小さな箱を取り出す。

「……………開けてみて。」

横島はチラリとヒヤクメを見、すぐに視線を箱に戻し、言われたままに蓋を開けた。

蓋の縁から『光が漏れて』くる。

「……………！ 光が、強くなってる……………！？」

今までも光ってはいた。

だがそれはこんなにも強い光ではない。

淡く儂く、まさしく蛍の光だった。

だが、これは ？

「……………これはね、言うなれば『蠟燭の最期の灯火』のようなものの……………」

横島はガバツと顔を上げる。

「私の『視た』限りでは、あと数時間から数十時間以内に、この靈氣構造は消滅してしまう……………。寧ろ、今まで保っていたのが奇跡に近い……………」

横島は徐々に、徐々に視線を下げ、『蛍』の形をした靈氣構造を見つめる。

確かに、ここまで保ったのは奇跡的なのだろう。

俺に宿ったルシオラの力も、二文字入る文珠もあの時からたった二、三日で消えていった。

いつ消えるか分からなかった。

もしかしたら、ずっと消えずにいるのではと思っていた。

しかし、消えずにそこに在り続けるものなど存在するはずもなく。

「……………」。

横島は蚩をそつと手に乗せ、優しく包み込む。

そしてそれを額に持っていき、目を閉じ、まるで祈りを捧げるような格好を取る。

その胸に去来する想いとは如何なる物か。

ヒヤクメにはそれが見えてしまうのだが、元よりそれは横島だけの感情なのだ。

ヒヤクメは神眼を閉じ、横島を見つめる。

「……………今まで、お前には随分と助けられてきたよな……………」。

横島は語る。

「ちよつと寂しくなったりとかしたらさ、お前を箱から出して見つめたり。少し暇だと思ったらお前に話しかけてみたり。

眠れない夜には、自分が寝れないってのに何故かお前に子守歌を歌ってみたりさ……………」。

横島の話、ヒヤクメが聞いている。

それを聞いてもいいのかヒヤクメは迷ったが、横島のしたいようにさせようと決意した。

自分の前で話しているのだから、聞いていても良いのかもしれない。そんな風に思ってしまう自分が、少し嫌になった気がした。

「お前が居たから、俺は今まで元気でいられたんだろうな。

お前が居たから、俺は前に進んでいけたんだろうな。

お前が居たから……。俺は、頑張ってこれたんだろうな。

でも、お前はもうすぐ消えてしまう……。」

横島はゆっくりと目を開く。

「俺、これからも頑張るよ。皆に頼るかも知れない。また皆に迷惑をかけるかも知れない。

でも、今の自分よりもっと成長して、お前の恋人だった奴は、こんなにも良い男だったんだぜって、胸を張って言えるぐらいにさ。」

横島は、ぎこちなく笑みを浮かべる。

明らかに無理をしているのだろう。

しかし、横島は止めない。

これは意地なのだ。

男として、女の子の前では格好をつけていたのだ。

特に、心の底から惚れ込んだ女の子には。

「向こうで見てくれよ、ルシオラ。

俺の中で見てくれよ、ルシオラ。俺は今、お前に誓う。悪夢に負けない。絶望に飲まれない。逆に飲み込んでやる。そんなもって格好良く言ってやるんだよ。

『正義の味方は悪には負けない!』みたいな台詞をさ。」

子供みたいな笑顔。

『彼』らしさが戻ってきた。

つい先ほどまで自らに絶望していた人物と同じとは思えない。それが如何なる心境の変化なのか……。

まだ、ヒヤクメにも。

そして横島にも分からなかった。

ただ、今までよりも胸が軽いような、そんな気がしていた。

「……今まで、俺のそばにいてくれてありがとうな。お別れは嫌だけど……。つらいけど……。いつかまた、会う日まで。」

横島は蛍を箱に戻し、そっと蓋を閉じる。

顔を真上に上げ、深々と息を吐く。

その後、ヒヤクメに対して礼を述べる。

「ありがとうな、ヒヤクメ。お前が教えてくれなかったら、俺はどうなってたか分からなかった。」

それに、こいつの『終わり』にも気付けなかっただろっし……。」

「いえ、そんな私は……。」

ヒヤクメは手をブンブンと振る。

更に言葉を繋げようとするが、外に出ていった猿神を、横島が呼ぶ。

「老師……! もう良いっすよ……!」

ヒヤクメはその行動に少々面食らうが、当の本人が言っているのだ。  
ヒヤクメは少々引きつった笑みを浮かべた。

「ありがとう。ヒヤクメももう戻りな。疲れたろ？」

「……………じゃあ、お言葉に甘えるのね。」

……………おやすみ、横島さん。」

ヒヤクメは立ち上がって応える。

「ああ。おやすみ、ヒヤクメ。」

横島は座ったまま応える。

ヒヤクメは客間を出て行き、入れ替わりに猿神が入ってきた。

「……………もう良いのか、小僧？」

横島はしつかりと頷く。

その変わりように少々違和感を覚えるが、考えても仕方のないこと  
だと思い、思考を中断した。

「ならばもう休め。お主のことはちゃんと見ておいてやるからの。」

「ありがとう、老師。」

横島は頭を下げる。

そして箱を手に、布団に潜り込む。

頭をスッポリと布団に隠し、小さな子供のように丸まっている。

猿神は電気を消し、壁にもたれかかり、毛布を被って目を閉じる。意識を横島に向けつつ、横島に何かあれば即座に動けるように目を瞑る。

二人が眠り、数時間。

不意に横島が目を開けた。

そして手の中の箱を開き、蛍を数秒見つめ、こう呟いた。

「今までありがとうな、ルシオラ。」

今までの礼じ。

「……………」。

「おめしなう。」

お別れの言葉を。

そして、螢の形をした靈氣構造は、夜の闇に消え入るように、この世界から消滅した。

## 第五話

『ちよつなら。』

了。



## 第五話（後書き）

お疲れ様です。

第五話いかがでしたでしょうか。

霊気構造の光が強くなったのはこの伏線だった！！

（どーっ！ん！！）

いや伏線かこれ。

次回から物語は加速していくと思います。

お楽しみに。

あと、活動報告にお知らせみたいな物を書いていますので、そちらもご覧ください。

それでは感想お待ちしております。

第六話（前書き）

お待たせ致しました。

第六話です。

今回、遂に横島君が……！

## 第六話

朝。

猿神は静かに目を開く。視界に横島が寝ている布団を収め、現在の様子を窺う。

昨夜は対して動きはなかった。

どうやら蛍の霊基構造は消滅してしまったようだ……、それは自分がどうこうすることではない。横島自身で折り合いをつけてもらうしかない。

他には何も無かったようだが、それでは今晚は夢を見なかったのだろうか？ 起こして確かめたいが今はまだ朝も早い。自分で起きるまで待っていた方が良かったろう。

猿神はそう結論づけ、また目を閉じる。

実はここ最近新発売されたゲームが面白く、四日間程徹夜をしていて眠たいのだ。

横島に異変が起きない限りは、このまま寝かせてもらおう。

猿神はちょっと無責任に再び眠りについた。

居間では既に皆が集まっていた。

タマモ・パピリオは少々眠たそうにしているが、それでも目はしっかりと開いている。

皆は猿神、そして横島を待っている。起きればここに来るだろうと考えてのことだ。

猿神がついているし、ここに案内をしてくれるだろう。

「……遅いわね、横島君。」

美神が時計を見ながら呟いた。

現在は午前十時半過ぎ。

確かに横島にしては起きるのが遅い。

「まあまあ。横島さんはここ最近眠れていなかったのでしょうか？」

それに加えて昨日あんなことがあったのですから、多少起きるのが遅くても仕方がないのでは？」

小竜姫が皆にお茶を入れながら美神に答える。

美神は若干口を尖らせ、ブーたれながらも仕方ないかと呟いた。

皆は熱いお茶を飲み、横島を待つ。

また夢を見たのではないか、そんな不安を胸に秘めながら。

そしてそれから十分程が経ち、遂に廊下から足音が聞こえてきた。

襖が静かに開き、皆がそこに注目する。

居間に入ってきたのは猿神と、そして。

「おはよーございます、皆……。」

頭をポリポリと掻き、若干の苦笑を浮かべた横島だった。

「よ、横島さん大丈夫でしたか!? 何か怖い夢とか見ませんでしたか!?」

その横島に真つ先に反応したのがキヌだ。

普段の運動音痴具合が嘘のように横島に近付き、無事を確認する。

横島は少々面食らったが、それでもハツキリと答える。

「ああ、大丈夫だよおキヌちゃん。夢は見なかったからさ。」

横島は額の中央、『神具』を取り付けている場所を指差しながらそう答えた。

その言葉に皆は一瞬ポカンとし、やがて、盛大な溜め息と共に良かったと呟いた。

シロヤキヌ、パピリオなどは涙を流して喜んでくれる。

ワルキューレは何度か頷き、小竜姫と共に静かに喜び合う。

ヒヤクメは横島を視たが、神具の影響か横島の心が見えない。

横島自身は笑っているし、何の負担も抱えていなさそうだ。

ただ、目が少し赤くなっているのが気になり、それを尋ねてみた。

ヒヤクメ自体は寝不足のせいかと気になったが、どうやら昨夜の内にルシオラの霊基構造が消滅してしまったらしい。

その光景を見て、少し泣いてしまったのだそうだ。

「……大丈夫？ 横島さん……。」

ヒヤクメは横島にそう尋ねる。

横島はパピリオを抱きしめ、頭を撫でてやりながら目を閉じ、ただ静かに大丈夫だと答えた。

泣いているパピリオをあやす横島の姿を、皆は静かに見守った。それしか出来ないが故に。

横島は喜んでくれている皆を見て、ルシオラのことと悲しんでくれている皆を見て、少し心を痛めた。

ルシオラのこととは本当に大丈夫だと思う。

昨夜誓ったのは真実だ。

悲しくても、苦しくても乗り越える。

確かに悲しい。

確かに苦しい。

だが、既にそれは極々僅かながら薄れてきている。

自分はこのなにも薄情な人間だったのか。

そう思うと自分が嫌いになって仕方がない。

そしてもう一つ。

昨夜、横島は夢を見た。

神具を付けているにも関わらず、夢を見た。

何度も自分が殺される夢。

何度も何度も繰り返し、『金色』に挑み、その度に返り討ちに合う

夢。

『金色』 マスターテリオンに、嘲笑されながら、失望されながら、殺され続ける夢。

今までとは毛色の違う夢。

ただただ純粹に、『横島忠夫』という存在を否定するかのようだった。

だが、横島は夢に吞まれなかった。

夢の『繰り返ししている主人公達』の感情が流れ込んでくる。

絶望、憤怒、悲嘆、驚愕、狂気、恐慌、虚無。

色々な絶望感が襲ってくる。

『それ』を、横島は受け止めた。

受け止めて自分の物とし、更に吞み込んだ。

昨夜立てた誓い。

『夢に負けない』それを実行したのだ。

その驚異的な精神力が一体何から来るのか、何処から来るのか横島自身すら分らない。

だが、横島は耐えている。

皆を騙してみせている。

この二つの嘘が、横島の心を痛めつけていく。

横島達事務所メンバーは妙神山を後にする。  
パピリオには更に泣かれたが、また遊びに来るとい言葉と、横島によるとある言葉、

「泣いているのはお前らしくないぞ？」

と

「俺は笑顔のパピリオが好きだなあ。」

という言葉と共に額に口付けをした。

所謂『デコチュー』である。

無論パピリオは真っ赤になりシロは拙者にもー！ー！ と突撃し  
キ又は指をくわえ羨ましがり小竜姫はあらあらと微笑みタママは胸  
に渦巻く何か黒い意識を視線に宿し横島を睨みつけ美神は横島をシ  
バき倒した。

横島は、『たまにはイケメンな行動を試してみたかった。後悔は無い  
が、反省はしている。』という供述を残した。

妙神山を下り、改めて事務所に帰ってきた美神達一行。取り敢えず  
横島は今日明日は休み。出勤は二日後となった。

横島は皆に手を振り、家路につく。

皆を騙している自分を思い返しながら。

タマモに言われた言葉を思い返しながら。

横島は、間違っただことをしているのだろうか？

## 第六話

『そして、少年は魔導書と出逢う。』

あれからひと月が経った。

横島は『何の効果も無い』のに、相変わらず神具を額に付けている。

本来なら問題なのだろうが、猿神が掛け合ってくれたのだろう。一年間は貸し出しの許可が下りたらしい。

横島は相変わらずの生活を送っている。

朝にシロとの散歩、昼に学校、夕方から夜は事務所に詰めている。忙しい日々だが、充実した日々でもあった。

ただ、急速に薄れていく悲しみに、横島は自分自身に怒りを覚えていた。

こんなに薄情な人間だったのか、と。

しかし、横島は気づいていないのだ。

横島の心の在り方に、『何か得体の知れないモノ』が関わっているということに。

それに気づかず、横島は日々を過ごす。

休日である今日もまた依頼があった。

依頼自体は簡単だったが、そろそろ装備の損耗具合が気になる。そこで、美神は横島に行き着けの店、『厄珍堂』へとお使いを頼んだ。

新しい神通棍や破魔札に吸引符、更には新型の見鬼君に霊体ボーガンとその矢等々、合わせて五億円は下らない品物の数々。それを取りに行かせたのだ。

「うおーっす。厄珍、いるかー？」

横島は声を掛けながら店内へと進む。

厄珍はカウンターに居たが、どうやらテレビに夢中で横島に気がついていない。

「かーっ！ 何やってるアルか、こんの意気地なしがーっ！  
」

そこはガバーっ！と行く所よーっ！ 等と叫びを上げている。

「うん、相変わらずのようで安心した。」

横島は変わらない厄珍が少し羨ましくなった。

その後数分間テレビ相手に説教をかましたり最後には金属バットでテレビを破壊したりした。

そしてようやく横島に気がついた。  
なんとも絶好調な男である。

「おー、坊主良く来たアル。商品はそこにあるから持っていくといネ。」

厄珍はカウンターの横を指差した。

合計五億円以上する商品を一つの袋に入れているのは正直どうかと思っのだが、横島は考えないようにした。

横島は店内を軽く見渡す。

「相変わらず色んな物があるなー。これとか一体何に使っんだ？」

横島は手近にあった何か変な形のこけしのような物を指差す。

角や悪魔的な翼やら真つ黒な体。  
なのに顔はこけしのような妙ちくりんな物体。

「ああ、それは魔除けの人形ネ。それを置いておくだけで悪魔は去っていくのヨ。」

横島は絶対嘘だろうなーと思った。

見た目があまりにも悪魔的で冒瀆的だったからだ。逆に悪魔を引き寄せるのではないだろうか……？ そんな気さえしてくる。

更に見渡す。

何か気になる。

何かは分からない。だが、気になるのだ。

何か、自分が『知らないのに知っている』物があるという予感。

店内を見渡す。

ゆっくり、しっかりと。

そして、それを見つけた。

大きく、黒い、革表紙の本。

『それ』を視界に収めた瞬間、記憶が爆発した。

『時に汝、名はなんと申す?』

『いいから答えよ、人間。名は大切だ。』

『鬼械神とは魔術の力を用いて造られた神々の総称だ。ただ此奴は少々強引な構造となっているようだ。魔術理論と科学の混血児のような……。鬼械神とは言い難いが、この際、かまうまい。ありがたく使わせてもらおう。』

『運命だ。』

『妾と波長が合う人間は、そうはいない。それに、他を探している時間的な余裕もない。』

『彼奴を野放しにしておけば、今日のようなことがどこかで起こる。いや、今もどこかで泣いている者もおろう。』

『邪悪を知り、それと戦う力を得、それでも汝は見て見ぬふりをするのか? その瞳を閉ざしたままでいられるのか?』

『案ずることはない。』

『妾と汝は端から奇妙な関係ではないか。それがさらに奇妙になったところで、たいした問題ではあるまい? それに汝といえるのは、これでなかなか心地よい。それが少しばかりこそばゆくなっただけのこと。ならば不必要に意識する必要もあるまい。』

『……汝は戦った。魔術師の力を失い、デモンベインを失い、それでも汝は戦った。絶望的な戦力差だった。すべてを諦め、投げ捨てたとしても、誰にも責めることなどできはしなかつたろう。だが汝は戦った。戦い抜いた。戦って戦って……今の今まで堪え続けたのだ。彼奴らを前に一步も退かず。だから……。』

『だから妾が間に合った。』

『汝え！ それでも男かあああつ！』

『股の下にぶら下げているのは何かっ！？ 飾りか、それはっ！？今の自分を鏡に映してみよ！ 情けなくはないのか！？ 情けなくて怒りが湧いてこないのか！？ そんな自分は殴ってしまえ！殴って殴って殴りまくって、動けなくなるまで殴ってやれ！ 否、いっそ殺してしまえっ！』

『汝は、あの娘に告げたよな。』全部無駄だったとして、なにもしないでいられるか』と。その言葉は偽りだったのか？』

『汝の強さを取り戻せ！ 汝の誇りを取り戻せ！ 汝は戦えるはずだ！ 汝の魂はまだ絶望に染まりきってないはずだ！ 今一度剣を手執り、立ち上がろう！ あの邪悪を討ち滅ぼそう！』

『それでも汝がまだ戦えぬというのなら……。』

「 妾が汝を強くする。 」

「 一人で抱え込むな。 苦痛も悲しみも後悔も、すべて我ら二人で分かち合おう。 我等は戦友。 我等は盟友。 我等は比翼の鳥。 我等は連理の枝。 共に魔を断つ剣を執ろう。 共に暗黒を踏破する路をいこう。 大十字九郎、我が主よ。 妾は汝を敬愛し、信仰する！ 」

「 妾は……。 」

「 妾だつて……ッ！ 」

「 妾だつて、汝のことが大事に決まっておるではないか！ 千年間、こんな激しい想いを抱いたことはない！ 主としてではなく、戦友としてではなく、妾は大十字九郎を愛して……！ 」

「 大十字九郎。 我が名をしかと心に刻み込め。 我が名はアル・アジフ。 アブドウル・アルハザードにより記された、世界最強の魔導書

なり!』

横島の目に、涙が溜まる。

だが、ここでは零さない。

ここでは流さない。

横島は目を瞑り、ゆっくりと深呼吸した。

早鐘のように高鳴る胸を押さえ、逸る気持ちを押し殺し、横島は厄珍に問い掛ける。

「……なあ、厄珍。この本って値段はいくらだ？」

「んー？」

厄珍は横島が指し示す本を見る。

それは、厄珍にとっては対して大事でもない、寧ろ厄介な本であった。

「ああ、それネ。それは正直私でもどうしようか迷ってた本なのヨ。何か不気味だし、売れないからネ。坊主が買っつていうなら安くしとくアルよ?」

「……ちなみにどれくらい？」

給料が上がったとはいえ、横島はまだ学生。出せる額には限界があるのだが……。

「んー……、坊主にはエロ本とか実験台とかで色々世話になってるアルからな、ここは特別に百万程で良いアルよ。」

百万。

厄珍にしては本当に安い。いつもなら一千万くらいにはなりそうな物だが……。

「……百万か……。」

しかし、それでもやはり横島にはまだ手が出ない値段だ。どうにか値切らないといけない。

そう考えていたのだが、厄珍はニヤリと笑い、こう付け加える。

「別にローンでも良いアルよ？ 三十六回払いまでならば良いアル。」

「マジか！？ 買う買う！ すぐ買う！」

横島はその言葉に食いついた。

百万の三十六回払いだから月々約二万八千円。

これならば多少値が上がっても、今の収入ならば何ら問題はない。

「ならコレにサインよろしくアル。」

「よっしやー」

横島は書類にサラッとサインした。  
ちなみに『私は薬の実験台になります。』という一文には全く気が  
つかなかったようだ。

「それじゃあ振り込みはいつものところネ。令子ちゃんによろしく  
アルー。」

「ああ、またな厄珍。」

横島は上機嫌で帰っていった。

厄珍は横島がサインした書類を丁寧に折りたたみ、カウンター下に  
置いてある棚に入れた。

その後、新しいテレビを用意し、また昼ドラを見始めた。

横島は荷物を事務所に送り届けた後、美神に早退を申し入れた。  
幸い本日は対した依頼も無く、意外とすんなり許可されたのだが、  
その代わりに次の週は無休となってしまうた。

横島はそれでいいと言い、元気に帰っていった。

美神達事務所メンバーは怪訝な顔をしたが、元気になった横島を見  
て、次第に笑顔になっていった。

どうやらこの一ヶ月、あまり笑顔を見せていなかったらしい。  
横島の抱いている罪悪感がそうさせていたのだが、それが美神達に  
分かるはずもない。



あの時、厄珍堂で流さなかつた涙を流す。

やっと、逢えた。

心にはそれだけが満ちていた。

それが本の圧倒的狂気をはねのけていた。

口が動き、言葉を発しようとする。

分かっている。

分かっているのだ。

これは自分の気持ちではない。

これは自分の感情ではない。

『夢の主人公』の感情／気持ち／心だ。

それは分かっている。

分かっているのだが。

「……………今まで、どこ行ってたんだよ……………」

分かっている、声に出したい気持ちを抑えきれなかった。

「ずっと……………ずっと、寂しかったんだぞ……………！」

涙が止まらない。まるで壊れてしまったかのように、次から次へと流れ出す。

「俺が、どれだけ……悲しかったか……!!」

横島は書を読み終え、胸に抱く。

もう離さないように、ギュッと強く抱き締める。

「逢いたかった……! ずっと、逢いたかった……!!」

横島はついに布団に倒れ込む。書を大事に抱えたまま。

「ずっと、待ってたんだからな……」

臉が下りていく。

精神的な負荷が大きかったのであろう、今にも気を失いそうだ。

だが、これだけは伝えておく。

あいつの代わりに。本当は誰にも代わりなんていないが、それでも。

言いたかった。

「お帰り、アル……」

横島は眠りについた。  
安らかな笑みと、安心を顔に刻んで。

横島が眠りにつき、数時間。

横島は書の内容のせいか、もしくは夢のせいか少し魔されていた。  
しかし、それでも抱える書は離さないまま。

と、書が輝きを放つ。

本は横島の腕から逃れ、宙に浮き、静かに開いた。

バラバラ、と頁が捲れ、一枚、また一枚と宙に舞う。

やがて宙に舞う頁はまた一つに集まり、今度は人型を成した。

紫がかった銀の髪。

フリルの沢山ついた白のドレス。

翡翠の瞳。

『夢の少女』の姿を取ったのだ。

少女は魔されている横島に向かい、人差し指と中指を立て、剣指を作る。

横島の額に指を付け、そして

「 第四の結印は旧神の紋章。エルダー・サイン脅威と敵意を祓うもの也。」

横島は五亡星の光に包まれた。

瞬間、横島は忽ち安らかな寝息となり、また微笑みが戻った。

それを見て、少女は思う。

何故、この少年は自分の事を知っているのか。

この少年の口振りでは、自分は彼と少なくとも顔見知り以上の関係だと思われる。

しかし、自分には何ら覚えがない。

考えて考えて、少女はやがて頭を振った。

考える必要は無い。

この少年が何者であろうと、自分の知ったことではない。

あの店から自分を買収取ってくれたのには感謝するが　それだけだ。

この少年には何か『良くないモノ』がちよっかいをかけているようだ。

ならば、感謝の印として、夜寝ている間であれば、安心を約束しよう。

問題が解決し、少年が自分を手放したとしても、最早どうでもいい。

( そうだ……どうでも良い……。 )

この世界に未練など何も無い。

( こんな……九郎の存在しない世界など……。 )

少女は涙を流した。

かつて愛した男を想い。

少女は涙を流した。

あの日の行いに、後悔しながら。

少女の体から光が溢れ、解けていき頁となる。

頁は宙を舞って一つに集まり、書の形態を取った。

少女は眠りにつく。

夢の中でなら愛する人と逢えるが故に。

少年も、少女も。

未だに歩みを止めたままでいる。

しかし、二人は出逢った。

この出逢いによって二人の運命はまた動きだすのだが、それをまだ、二人は知らない。

今は、窓から覗く月だけが眠る二人を見つめていた。

## 第六話

『そして、少年は魔導書と出逢う。』

了。

## 第六話（後書き）

お疲れ様でした。

はい。

ようやく登場です。

アルです。

アルですよ！

アルーーーーー！ 俺だーーーーー！ 結婚してく（ry

はい冗談です。

アルの旦那は九郎ちゃんだけです。

異論など存在するはずがありません（キツパリ）

ちなみに五亡星の漢字が間違っているのですが、私の携帯では表示されなかったのです。

（・・・）シヨボーン

活動報告にお知らせがありますので、そちらも合わせてご覧くださ  
い。

それでは感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9230x/>

---

汝、魔を討つ刃となれ。

2011年11月23日17時49分発行